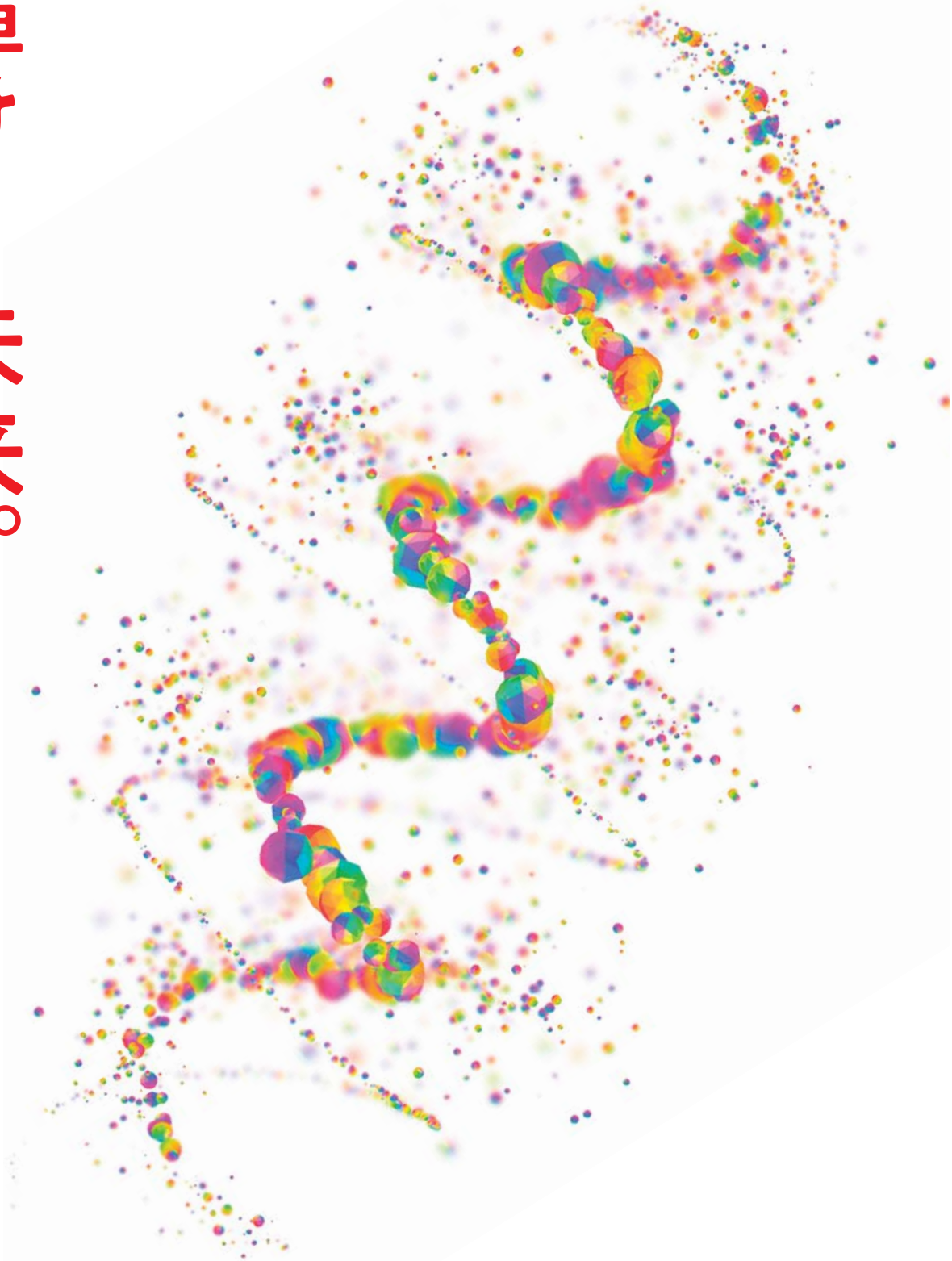
輝け！未来。



ANNUAL REPORT 2021

一般財団法人
三菱みらい育成財団

Contents

理事長メッセージ ····· P2

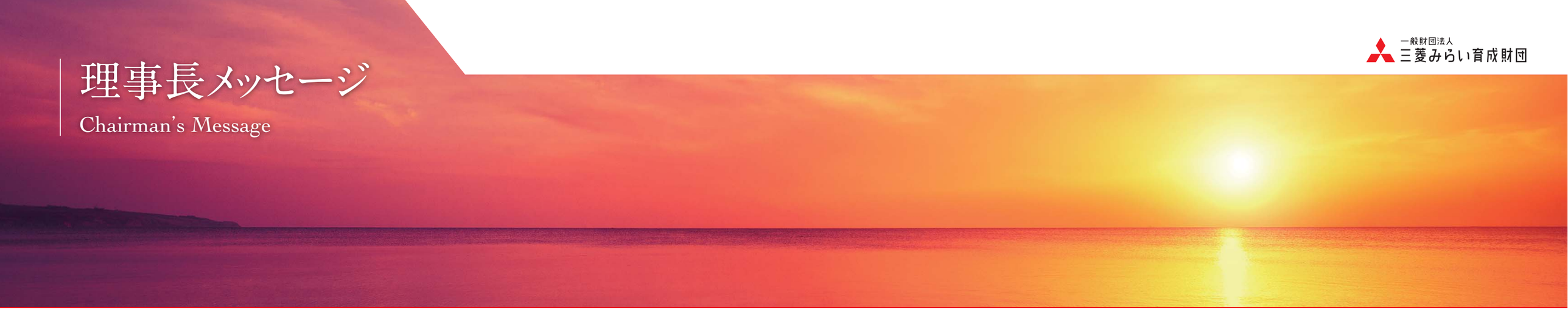
●Chapter 1　2022年度の取り組み ····· P6
2022年度プログラム ····· P7
各カテゴリー選考委員からのコメント ····· P10

●Chapter 2　プラットフォーム事業の推進
助成先フォローアップ ····· P12
2021・2022年度活動スケジュール／
プラットフォーム事業 ····· P13

〈Special Talk みらい×育成 座談会〉 ····· P16
探究学習とSTEAM、分野横断の交流から
生まれる未来の教育のカタチ
アドバイザリーボードメンバー 宮本久也氏、日比谷 潤子氏、
大島まり氏／藤田 潔 常務理事

●Chapter 3「心のエンジンを駆動させる教育プログラム」
分析レポート ····· P22
●Chapter 4 2022年度 助成先一覧 ····· P30
●Chapter 5 会計報告 ····· P42
●Chapter 6 財団概要 ····· P44

理事長メッセージ
Chairman's Message



三菱グループ創業150周年記念事業として「日本を支え発展させる次世代人材の育成」を掲げ2019年10月に設立された私たちの財団も3年目を迎えました。

この間、事業を構想した時点においても既に顕在化していた地球温暖化、格差の拡大と社会の分断、そして米中の対立といった問題は、パンデミックとそれに続くロシアのウクライナ侵略によって深刻の度を増し、世界の二極化、三極化が進んでいます。

わが国においては、長期的な経済の停滞が続く中で、コロナ禍によってデジタル化の遅れや医療提供体制の脆弱性、非常時における指導力の欠如があらわになり、さらにウクライナ問題によってさまざまな領域での安全保障とレジリエンスが大きな課題となって立ち表れています。

いずれも、変数の多い連立方程式を解くような複雑な問題であり、その解決には長い時間を要することになるでしょう。「VUCA※の時代を生き抜き未来を切り拓く人づくり」という私たちが自らに課したミッションはますます重要になってきました。

2021年度は、高校生を対象とする初年度からの「心のエンジンを駆動させるプログラム（カテゴリー1・2）」、「先端・異能発掘・育成プログラム（カテゴリー3）」に、大学1・2年生を対象とする「21世紀型 教養教育プログラム（カテゴリー4）」と「教員養成・指導者育成プログラム（カテゴリー5）」が加わり、当初計画していたフルラインの助成事業がそろいました。

カテゴリー4は現代におけるリベラルアーツの在り方を問い直す取り組みであり、それがカテゴリー1・2の高校における探究型学習とつながることで、高大接続の太い柱を築くことができるのではないか。すなわち、「主体的・対話的で深い学び」の姿勢を身に付けた若者たちが、「アーツ（文理横断的なarts／技芸）」を獲得し自らの判断の基軸をつくり上げることで、未知の世界に挑むチカラが生まれるのではないかと考えています。

カテゴリー5は、従来の教科型教育とは様相を異にする探究型の学びをファシリテイトするという新たな役割に戸惑いを覚える高校の先生方を対象に、いわば学び方を学んでもらうプログラムを開発する取り組みです。これがないと探究型学習は、本来の狙いからそれてAOや総合入試のためのテクニックになりかねません。

これらのプログラムの採択件数は初年度が66件参加者数2万6,000人、昨年度は80件5万4,000人、選考が終わった3年目の助成先を合わせると、累計220団体、参加者数12万人、助成総額も年間8億円を超える規模となります。

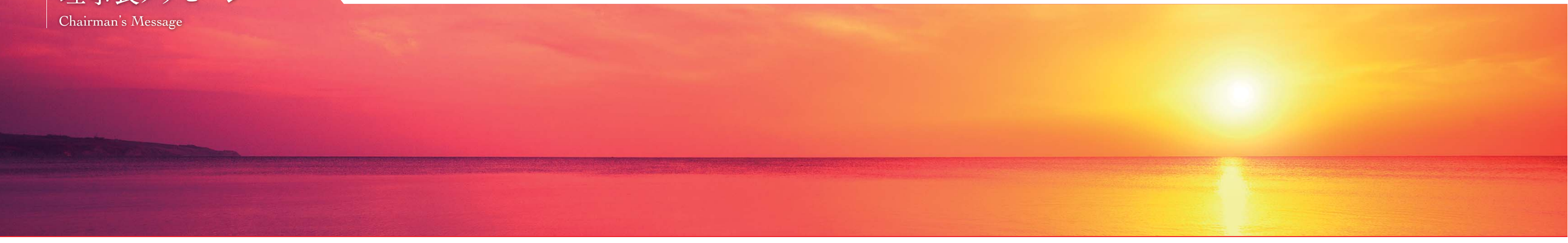
そして、助成事業と並ぶもう一つの柱であるプラットフォーム事業も立ち上がりつつあります。助成対象の高校・大学やNPO等をネットワーク化し情報交換の場を提供することで、お互いの悩みや課題を共有し、その解決策を議論し、そこで見いだされたグッドプラクティスを横展開するとともに広く社会に発信する試みです。昨年度は3回のオンライン交流会と「令和の高校教育に求められる教育プログラムとは」をテーマとしたシンポジウムを開催し、参加者の皆さんから「多くの気付きを得ることができた」という反響が寄せられました。

私たち自身も多くのことを学びました。例えば、探究型学習の難しさはテーマの設定と評価にあること、校内での取り組みを持続可能なものとするには組織的な対応と蓄積された知見の継承が鍵となること、学外の大人たちからの助言が生徒たちに大きな刺激を与えること、そして、最大の悩みはどうすれば受験や部活との関係においてその意味と重要性を教員・生徒・保護者に理解してもらえるかにあること、等々。

また、シンポジウムで紹介された「心のエンジンが駆動する」ことが生徒たちにどんな変化をもたらすかについての初期的分析結果はうれしい驚きでした。自己肯定感が増し、将来に向けての積極的な姿勢が強くなるだけでなく、自分の過去に対する肯定感が高まるというのです。私たちの事業は短期的な成果を求めるものではなく定量化するのも容易ではありません。ただ、日本の教育の在り方を変えるという大きな目標を掲げる以上、こうしたエビデンスを積み上げることで社会に

※Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の四つの単語の頭文字を取った造語

理事長メッセージ
Chairman's Message



インパクトを与えたいと考えています。

私たちの活動は教育改革という私たちにとっては未知の領域への挑戦であり、しかも10年の時限プロジェクトです。現場の皆さんと共同作業を進める中で見えてくる気付きを基に随時プログラムの見直しと改善を図り、目標に向けて軌道修正を行っているのもそのためです。

カテゴリー1に関しては、財団の構想段階からのテーマだった地方創生の観点から、地域に根差した取り組みにより光を当てるために選考基準の改訂を行った他、カテゴリー3には、科学技術系の先端・異能の才能発掘と並んで、日本の産業の停滞を打破し新たなビジネスを生み出す鍵となるアントレプレナーシップ教育を選考対象に加えました。カテゴリー5でも教育系大学における大規模なプロジェクトと並んで、彼ら自身がスタートアップである教育事業者によるユニークな取り組みも応援しています。

また、2023年度からは、「学外の大人たちからの助言が生徒たちの大きな励みになる」という教育現場の声と三菱グループ各社からの「自分たちも汗をかきたい」という声を結ぶ形で各地の高校などへの社員の派遣を開始する他、この夏には社会的な課題であると同時に各社にとっての切実な課題でもある理系女子を応援するプログラム「理系ブロッサム」をスタートさせます。後者は、グループ企業で活躍する理工専攻の若手女性社員が女子高校生に自然科学を学ぶ楽しさと産業界でのキャリアの広がりを少人数の対話形式で伝える試み。同時に社員たち自身の学びの機会となることも期待しています。

社会への情報発信としては、来年の発刊を目指して保護者を含む多くのステークホルダーに読んでもらえるような書籍の出版を計画しています。財団としての第1フェーズでの成果を世に問い、フィードバックを得て次のステージに進みたいと考えています。

最後にもう一つお伝えしたいことがあります。

それは、こうしたさまざまな取り組みの背景には、現場のニーズとシーズを活動の起点に据えるための財団メンバーによるフィールドワークとそれに大変な熱量で応えてくださる先生方や教育事業者の皆さんと若者たち、そして、教育の分野で豊富な実績と高い識見を有する諸先生と財団の設立母体の経営者で構成される評議員会・理事会・アドバイザリーボードでの密度の高い議論と実践の積み重ねがあること、そして、それを支えているのはメンバーが共有する日本の現状と教育の在り方に対する危機感だということです。

産業界には、バブル経済崩壊後30年間にわたって経済の停滞を招いたことに対する自省と再生に向けて事業改革・社会構造改革をやり切らなければならないという切迫感があります。そのためには多様な個性を持ち創造力にあふれた人材がどうしても必要です。教育界における教育改革への新たな潮流も、私にはそのミラー・イメージのように見えます。

良い教育システムを創り出し定着させ発展させるには、パイオニア的な試みとそれに続く地道な営為が必要です。私たちにできるのはわずかなことでしかありませんが、より良い明日の日本と世界を築く次世代の育成を目指し、このプロジェクトに参加してくださる全ての皆さんと共に粘り強く活動を続けてまいりますので、ご理解・ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

一般財団法人
三菱みらい育成財団
理事長
平野 信行

2022年度の取り組み

2022年度の応募総数

カテゴリー1
96件 採択 48件

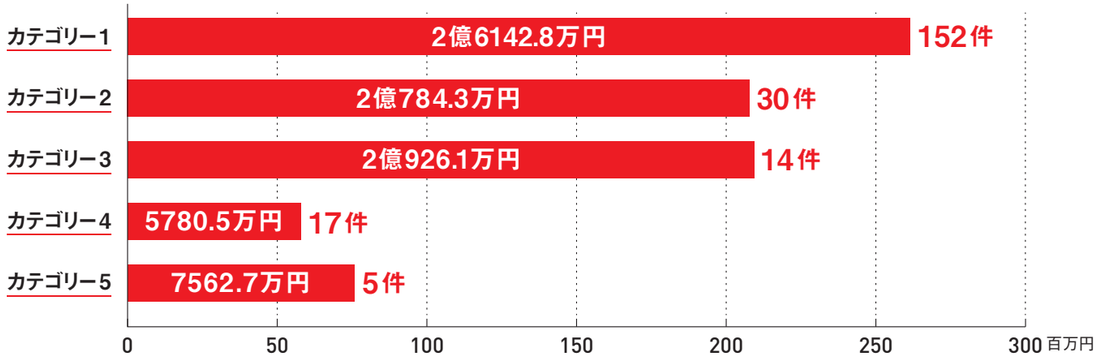
カテゴリー2
72件 採択 11件

カテゴリー3
20件 採択 6件

カテゴリー4
23件 採択 7件

カテゴリー5
24件 採択 2件

2022年度の採択件数・助成額（継続案件を含む）



2022年度のカテゴリー1の助成先

全国42都道府県

2022年度の全カテゴリーの対象者数

約121,000人

2022年度プログラム

カテゴリー1　高等学校などが学校現場で実施する心のエンジンを駆動させるプログラム

■プログラムの形態
・総合的な探究の時間や教科等、教育課程の一環として、原則として、学年の生徒全員を対象として行うもの
・内容は生徒の実態に応じて設定し、学習領域や教育手法は自由

■期待する活動イメージ（全ての活動が含まれている必要はありません）
・主体的・協働的な学習（課題／研究テーマの発見から仮説設定、検証、解決・解明までの一連の流れを生徒が自主的に取り組む）プログラム
・多様な価値観に基づき思考や発想を出し合いながら創造的な活動や探究的な活動を行うプログラム
・学外（企業、大学・研究機関業、他校、地域等）との連携や、学校・地域に定着させるための体制や仕組みの整備も含まれると望ましい

■習得・向上を期待する資質・能力
思考力や基礎的な能力に加えて、プログラム後も生徒が継続的に心のエンジンを駆動させ、将来、社会参画・問題解決していくために必要となる資質・能力の習得・向上を期待

■助成対象者／プログラム参加者
高等学校等／高校生等（15～18歳）

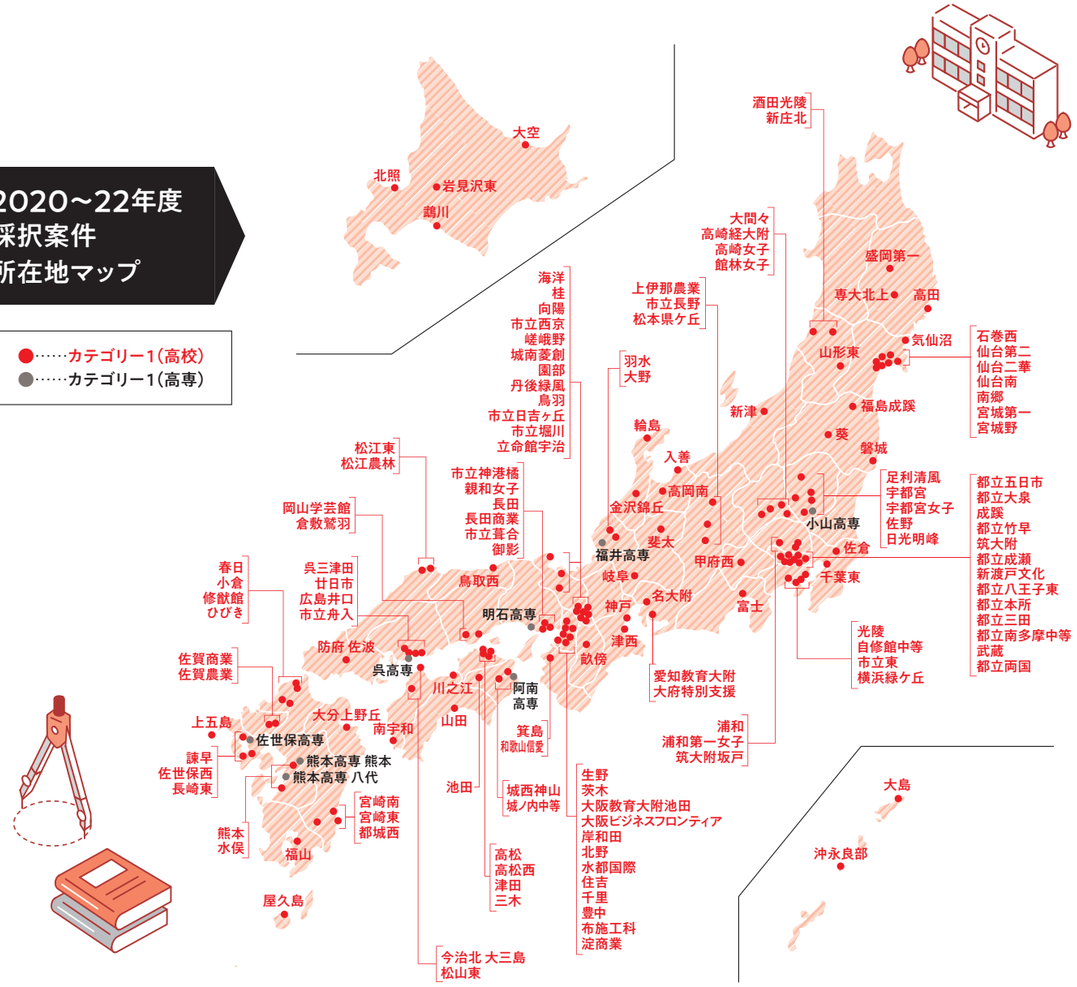
■助成期間
1年間。取り組みの定着を目的に原則3カ年まで継続助成
（成果報告の内容次第では、継続助成しない場合もあり）

■金額
年間100～200万円程度／校
（参加者が100人以下は最大100万円）

■他団体からの助成有無
複数団体（自治体、各種法人等）からの同一プログラムへの助成金の有無は問いません。ただし、SSH、WWL、地域との協働対象校で文科省から助成を受けているプログラムは対象外です

2020～22年度 採択案件 所在地マップ

●……カテゴリー1（高校）
●……カテゴリー1（高専）



2022年度プログラム

カテゴリー2　NPO法人等、高等学校等以外の主体が行う、より先進的、特徴的、または効果的な「心のエンジンを駆動させるプログラム」

■プログラムの形態
・学校外または学校内で一定期間、継続的に行われるプログラム（プログラム形式）、または、広く参加者を募り、成果を競い合うプログラム（コンテスト形式）
・学習領域や教育手法は自由（例:地域・社会課題解決学習、キャリア教育、STEAM教育、国際理解教育、食文化・農林水産、伝統文化・環境・芸術等）

■期待する活動イメージ（全ての活動が含まれている必要はありません）
・主体的・協働的な学習（課題の発見から仮説設定、検証、課題解決までの一連の流れを生徒が自主的に取り組む）、創造的な活動や探究的な活動を行うプログラム
・学校単独では実施できない先進的または特徴的な内容（参加者間の交流や特定の属性・志向等）や手法を用いたプログラム
・助成終了後も継続実施するための体制や仕組みの整備（普及広報、自立化方策等）が含まれると望ましい

■習得・向上を期待する資質・能力
思考力や基礎的な能力に加えて、プログラム後も生徒が継続的に心のエンジンを駆動させ、将来、社会参画・問題解決していくために必要となる資質・能力の習得・向上を期待

■助成対象者／プログラム参加者
教育事業者・大学等／高校生等（15～18歳）

■金額
年間500～1,000万円程度

■助成期間
1年間。取り組みの定着を目的に原則3カ年まで継続助成（成果報告の内容次第では、継続助成しない場合もあり）

カテゴリー3　卓越した能力を持つ人材を、早期に発掘・育成する教育プログラム「先端・異能発掘・育成プログラム」

■プログラム参加者の将来イメージ
●先端科学の研究開発
将来、分野を問わず先端的・卓越的な基礎研究・応用研究を担う人材、パラダイムシフトにつながるような新技術や新領域の研究開発、イノベーションを担う人材
●グローバル・ビジネス
将来、グローバルな企業・組織において活躍する人材、国際的な視点で、高い志・創造力等を備えたビジネス・リーダー人材
●アントレプレナーシップ
将来、既存ビジネス・市場等の構造変革につながるような革新的な事業などに携わる人材
●地球的課題、地域・社会課題解決
将来、国際的な機関・組織・NPO・企業において活躍する人材、地球的課題（SDGs等）、地域・課題解決などに携わる人材
●芸術・クリエイティブ
将来、卓越した能力を発揮して、創造的な活動により国際的に活躍する人材
※なお、プログラム自体の卓越性に加え、飛躍的な成長が期待できる参加者の効果的な発掘方法も期待します

■助成対象者／プログラム参加者
大学、研究機関、教育事業者等／高校生等（15～18歳）、アントレプレナーシップのプログラムについては、高校生等に加えて「大学1・2年生相当」も対象とする

■金額
年間1,000～2,000万円程度

■助成期間
1年間。取り組みの定着を目的に原則3カ年まで継続助成（成果報告の内容次第では、継続助成しない場合もあり）

カテゴリー4　大学・NPO等で行う、「21世紀型 教養教育プログラム」

■21世紀型教養教育 領域
・人文科学領域（倫理、哲学、宗教、歴史（現近代史を含め）等）を中心に社会科学（法学、経済学、社会学等）、自然科学（数学、物理、生命科学等）を含め、これらの知識を融合させ「正解のない問い」について自分の頭で考えて、アウトプットするプロセスまで含むもの
・上記に加え、現代的な課題についても取り上げ、同様の手法で取り組むもの（AIと倫理、感染症対策、温暖化、エネルギー問題、ダイバーシティ・インクルージョン、サステイナビリティ、SDGsの課題解決 等）

■プログラムの形態
大学1～2年生向けに行われる教養教育において、リベラルアーツ関連領域の知識を基に、対話的手法により自己の見識を高め「モノの見方・考え方（観）」を養うもの（Critical Thinking＋Writing）

■期待する活動イメージ（例示）
・教養教育関連領域の講義と少人数対話型形式のディスカッションを繰り返すことでの自己啓発を組み合わせたもの（大人数での講義と少人数対話型の混合プログラムも対象）
・大学における正式科目（講義＋演習等）、複数の大学を跨ぐ活動など形式は自由（ただし、イベント等数日間の短期プログラムは除く。3カ月以上継続して行われるもの）また、正式科目ではないパイロットプログラム等（大学外で実施する私塾のようなプログラム）も含む

■助成対象者／プログラム参加者
大学、教育事業者等／大学1・2年生相当（18～20歳）

■金額
年間100～800万円程度
（参加する学生数に応じて金額は変動。目安としては1万円／人）

■助成期間
1年間。取り組みの定着を目的に原則3カ年まで継続助成（成果報告の内容次第では、継続助成しない場合もあり）

カテゴリー5　「心のエンジンを駆動させる」ための導き手をつくる育成プログラム「主体的・協働的な学習を実践できる教員養成・指導者育成プログラム」

■プログラムの形態
大学、株式会社、NPO等の教育事業者等が行う主体的・協働的な学習を実践する指導者育成プログラムの開発および実施。ただし、イベント等数日間の短期プログラムは除く

■期待する活動イメージ（例示）
・探究型活動に携わる高校教員・関係者を養成・育成するためのプログラムの開発
・探究型活動の教員養成プログラムの実施

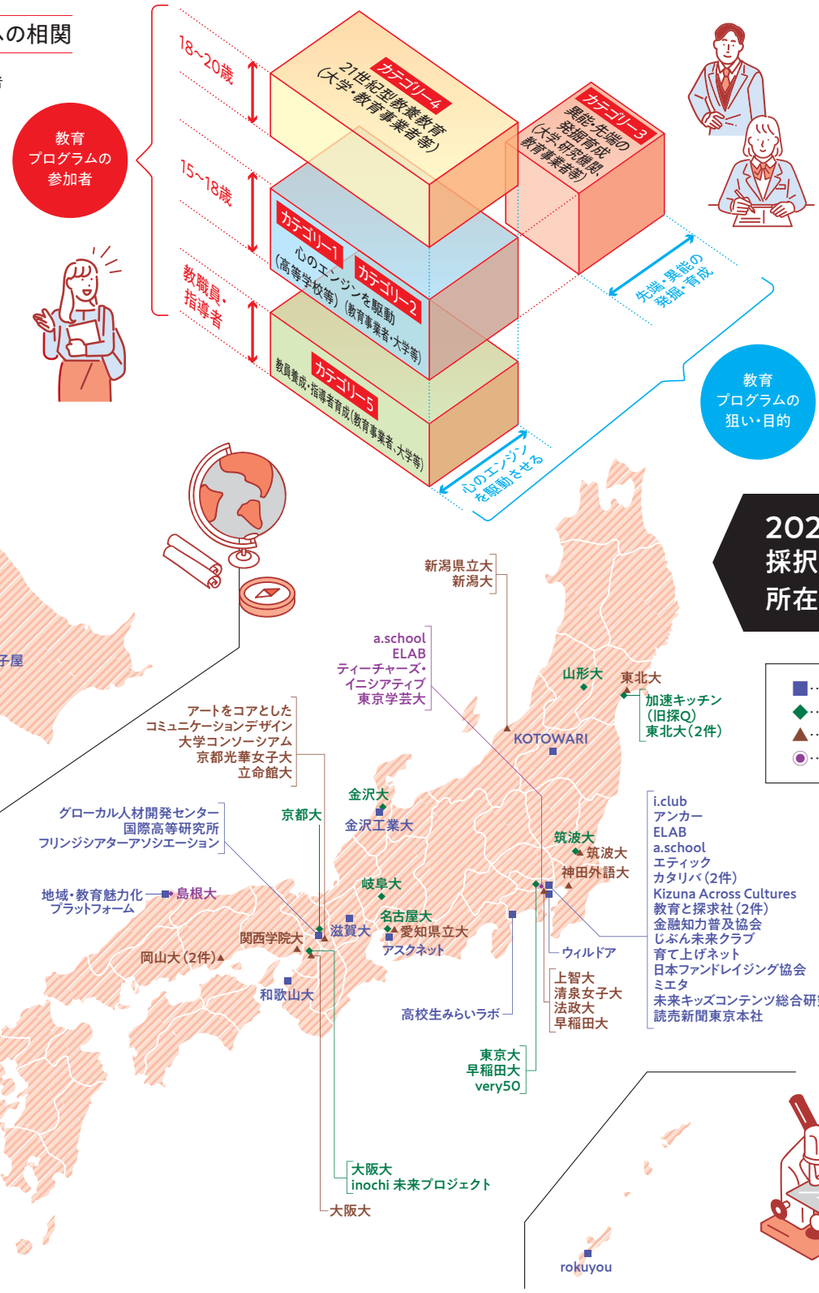
■助成対象者／プログラム参加者
教育事業者、大学等／高校教員・指導者（参加者は、教員免許保有者に限定せず。高校教員を目指す人も含める）

■金額
年間1,000万円程度

■助成期間
1年間。取り組みの定着を目的に原則3カ年まで継続助成（成果報告の内容次第では、継続助成しない場合もあり）

各プログラムの相関

※（）内は助成対象者



選考委員の講評

各カテゴリー選考委員からのコメント

カテゴリー1

選考委員 01

昨年まで応募のなかった県から応募があったり、昨年度より内容を充実させて再チャレンジしてくる学校があったりするなど、本財団の助成事業に対する認知度の高まりや期待の大きさを実感しました。その一方で探究学習に取り組む学校が広がる中では仕方がないこととはいえ、プログラムの内容がパターン化する傾向が見られ、審査する側のワクワク感が少し薄らいできたのが残念です。

選考委員 02

3年間、選考に関わらせていただいたが、今年度の応募企画は全体的に見るとやや小粒な感想を持った。逆に言えば、大学と連携した課題研究であれ、地域の魅力を発信する地域探究であれ、学びのフレームが定式化することにより、「探究学習」が浸透してきている証しなのかもしれない。そうした中、教員が情熱を持って取り組んでいる型破りでユニークな実践も散見できた。また、今年度は私学からの応募も多数あった。うれしい限りである。

選考委員 03

地域や自校が抱えている課題に、真摯に向き合っている学校が多く、心を打たれました。中には、方向性をはっきり示せず、取りあえず外部団体にすがりたいという学校もありました。面接で熱く語ってくださった先生方の姿から、小手先だけではなく、正面から堂々と取り組むことこそ、「生徒たちの心のエンジンを駆動させる取り組み」につながることを確信しました。生徒や学校が変容していくのが楽しみですし、本プログラムに関われたことに感謝しています。

選考委員 04

今どんな現状で、それをどのように改善すれば、生徒の心のエンジンを駆動できるか。これらの問いにどれだけ丁寧に向き合うかが重要であると思う。内発を促す外発は、そう簡単なものではない。現状を丁寧に分析し、仮説を立てて実践し、それを評価してさらなる実践に生かしていく。このことを学校内で共有して、行動を重ねているか。取り組む上で忘れてはならないのは、謙虚に問い続けることと、誠実に省察することだろうと思う。

選考委員 05

過去2年に比べ申請内容についてこちらが感服させられるような学校が少なくなり、取りあえず申請をしてみる、といった学校が増えているように感じる。今後はむしろ、チャレンジ精神旺盛で、生徒の「心のエンジン」を駆動させるべく、意欲的に取り組んでいる学校を見いだし、プログラムの問題点・課題を適切に指摘した上で、助成先のコミュニティーに加えることによって、新しい知見や課題解決につなげられるところを選んでいくことが必要になってくるのではないだろうか。

選考委員 06

審査を通して、全国各地の高校で独自の魅力的な取り組みが行われていることを知った。ただ、経費計画で「先進校視察」を挙げている学校が多くあった。他校に学ぶという「謙虚さ」と、わが校だからこそできるという「傲慢さ」、そのバランスが大事だが、「先行」例に縛られずに一から創り上げる姿勢を大事にしてみてはどうだろうか。そして三菱みらい育成財団をプラットフォームとして交流し、互いに刺激を与え合いながら各校の取り組みがさらに発展していくことを願う。

カテゴリー2

選考委員 07

多様で独創的な企画が多く提案されるようになっていると感じます。印象的なのは、高校生に良い影響を与えようと真剣に、情熱的に取り組む、企業、NPO、大学などの枠を超えたリーダーの皆さんの姿です。事業企画の内容も大切ですが、その情熱的な姿勢自体が高校生たちに良い影響を与えるような気がします。本助成が実施主体の皆さんの経験や知見の交換、ネットワークの広がりにつながるよう期待しています。

選考委員 08

昨年までに採択されている団体との面談からは、活動がどのように進んでいるのか、新たに発見された課題がどういうものなのかを教えていただきました。また、今回新たに申請いただいた団体との面談からは、これまで知らなかった取り組みを数多く教えていただきました。同じ高校生といえども一人ひとりは実に多様です。高校生たちの心のエンジンを駆動させるためのアプローチも多様であるべきだということに改めて気付かされました。

選考委員 09

「心のエンジンを駆動する」という明確な趣旨・イメージに共感する素晴らしい申請がたくさんありました。突き抜けた先進的先駆的取り組みへの支援と、そのような機会をできるだけ広く、自力では情報にたどり着けない層にも届けるための支援。どちらも同じように価値があるものに感じられました。今年度採用されなかった申請の中にも、応援したい取り組みがたくさんあり、自力でできる活動を続けつつ、再度チャレンジしていただきたいです。

カテゴリー3

選考委員 10

先端科学研究、グローバルビジネス、アントレプレナーシップ、地球的課題・地域・社会課題解決、芸術・クリエイティブ等多岐にわたり、「先端・異能発掘・育成」を目指す。財団側のご尽力で今年はアントレプレナー関連の優れた応募も増え、感心させられた。異能・異才の出る杭を打ってはいけない。子どもたちを叱咤激励し温かく育てたい。まさにこれからの日本に不可欠の人材。優れた事例が社会に与える波及効果に期待している。

選考委員 11

今年も、選考の時期がやってきて、オンラインの向こうから、先生方のプレゼンが画面に映し出される。どこかワクワクしている自分を感じながら、多くの気付きがあって、問いを投げ掛ける。アントレプレナーシップ教育のテーマか、今の高校生・大学生がこんなに夢中になっているのか、日本はまだまだ大丈夫だ、若者は、輝くことの代名詞のようで、さすが三菱の名前がきらりと光り、弾けるような声が飛び交う選考会議によく似合う。

カテゴリー4

選考委員 12

カテゴリー4としての支援は2年目である。昨年度と比べた時の今年度の採択プログラムの特徴を一言でいえば、「動く」という言葉に集約されるように思う。すなわち、身体を使って動く、大学から地域に飛び出して学ぶ、課題解決のために多様な学問分野を動員する等々。いずれも「動く」ことで、問題を捉える視野を拡大し、より深く考えることが狙いである。これが教養教育の新たなトレンドになるか、今後が楽しみである。

選考委員 13

教養教育奨励のための新カテゴリーが創設されてから、2年目になりました。1年目に採択された大学・団体が、コロナ禍にもかかわらず目覚ましい成功を遂げているのをとてもうれしく思いました。一方、2年目の新規応募が少なかったのが残念でした。教養教育という大学教育の本質部分での新たな挑戦を形にする手助けをする財団の援助は、非常に貴重だと思います。新時代の人材育成のモデルになるさまざまなアイディアが、今後も多く提示されることを期待しています。

カテゴリー5

選考委員 14

民間人や学生などを対象に既に実績のあるプログラムを高校教員対象に再構成したものが多く、プログラムの内容や方法に先進性やユニークさが感じられるものも目に付きました。その一方で高校現場や高校教員の現状や課題のリサーチが十分でなく、実現性や効果の面で疑問符が付き採択に至らなかったものもあり、プログラムを作成する民間事業者や大学に対し高校へのアプローチを何らかの形でサポートする必要性も感じました。

選考委員 15

教師を育てるプログラムについて、さまざまな観点、手法、評価法等から、多様な形でのプログラムが考えられ、その提供方法等についても工夫が見られたが、普通科、専門学科、総合学科等多様な教育内容の学校があり、教科の専門性を強く求められ、生徒の卒業後の進路選択に深く関わる指導を求められる高校教員の実情を踏まえた有効なプログラムを、どういう時期にどんな形で提供するのか、教育委員会や校長会等との連携協力をどう構築するのかといったことが、もっと考慮されるべきかと思う。

プラットフォーム事業の推進

助成先フォローアップ

昨年同様、助成が決定した先については、コロナ禍の中ではあったが、
助成決定後財団メンバーが順次個別に訪問し、プログラムの今後の取り進め等につき面談を実施した。
また、年度末に行われる成果報告会等については、
可能な限り財団メンバーが見学またはオンライン視聴を行った。

カテゴリー１の高校・高専については、引き続きコロナの影響で研修旅行等の先を変更したり、外部専門家に学校に来てもらう予定をオンラインに変更したり、種々工夫を行うことを前年度より実施してきたこともあり、スムーズに変更計画が実施されている様子であった。探究学習プログラムの構成は学校ごとに特色があるものの、外部との接触が限られた中で「社会に開かれた教育課程」という点では対面での実施が待たれるところである。

また、2021年９月にはカテゴリー１対象校の生徒向けに三菱UFJリサーチ&コンサルティング社のアンケート調査を実施。生徒の探究性、主体性、協働性、社会性を測定するもので、今回は2年分実施の学校もあり、経年変化を見るには有効な手段であると考えられる（P22～参照）。

カテゴリー2、3については、計画していたプログラムのほとんどがオンラインに切り替わり、その特性を生かし距離を超えて大勢の生徒を参加させたプログラムが多く見られた。オンライン故に発言がしやすいという面もあることから、指導役と密接にコミュニケーションが取れたケースもあり、当面はこのようなハイブリッドの取り組みが継続していくものと思料する。

カテゴリー4については、7月から助成金を支給したため、新規のケースでは夏前のプログラムの実施が難しいケースもあり、2021年度はパイロットプログラムを実施、本格実施は2022年度というケースも見られた。

カテゴリー5については、東京学芸大学は着々と取り組みを進めており、コンソーシアムの範囲も広がっている状況。民間事業者2社の取り組みは小規模であるが、実験的な取り組みとして今後の展開を期待したい。

2021・2022年度活動スケジュール

2021年度

6月	第５回 アドバイザリーボード会議
	第１回 理事会
	第１回 評議員会
7月	**交流会**
	第２回 理事会
9月	**成果発表会・表彰式**
11月	**交流会**
	第６回 アドバイザリーボード会議
12月	**シンポジウム開催**
	第3回 理事会
2月	**交流会**
	22年度助成公募開始
3月	各団体の成果発表会見学
	継続審査
	第７回 アドバイザリーボード会議
	第４回 理事会

2022年度

4~5月	助成先選考
6月	第８回 アドバイザリーボード会議
	第１回 理事会
	第１回 評議員会

プラットフォーム事業

年度・カテゴリーを超えて助成先同士をつなげ、
交流を図るプラットフォーム事業を2020年度からスタートさせた。

■交流会開催

（2021年7・11月、2022年２月）

2021年度は助成先の担当者交流会を３回、それぞれ2日ほどを用意して参加を促した。交流会の目的は「知り合うこと」と「ナレッジシェアをすること」であるが、距離を超えて集まることができたこともあり、大変好評だった。各回に例えば「学びづくり」「組織づくり」といったテーマを決めて、ブレークアウトルームにて6～8人程度でディスカッションを行ったり、事例紹介としてカテゴリー1・2から事務局で選んだ助成先の取り組みの紹介を行ったりして、有意義な会となったと思われる。

交流会で先生方から提起された高校現場の課題としては、以下のような点が挙げられた。

❶教科／受験との関連をどう考えるか
❷探究担当の先生だけが取り組んでおり学校全体の取り組みとなっていない
❸異動により人が変わると取り組みの継続性に難あり
❹プログラムとしての評価の問題
❺保護者の意識・理解の問題

また、この交流会を通じて横の連携が行われ、助成先同士の生徒の交流会が企画・実施されるなど面白い取り組みも行われるようになった。交流会で出たさまざまなコメントや意見をまとめて参加メンバーにフィードバックを行うとともに、年間3回開催することを計画している。

■成果発表会・表彰式（2021年9月）

各助成先の成果発表の場として、助成先に8分動画（パワーポイントに音声吹き込み）を作成願い、財団のホームページに掲載した。この成果発表動画から選考委員がカテゴリーごとのグランプリ、準グランプリを選出し、特別賞も含め、以下の通り決定した。また、助成先の投票によりベストプレゼンテーション賞も選出され、2021年9月にウェビナー形式で表彰式を開催した。

カテゴリー1

グランプリ（東日本）	東京都立八王子東高等学校
グランプリ（西日本）	大阪府立北野高等学校
準グランプリ（東日本）	長野市立長野高等学校
準グランプリ（西日本）	阿南工業高等専門学校

カテゴリー2

グランプリ	認定NPO法人金融知力普及協会
準グランプリ	NPO法人エティック

カテゴリー3

グランプリ	国立大学法人大阪大学
準グランプリ	国立大学法人筑波大学

特別賞

時代を先取りするDX賞	一般社団法人 i.club（カテゴリー2）
生徒が「主役」賞	長崎県立諫早高等学校（カテゴリー1）

ベストプレゼンテーション賞

最優秀賞
長野県上伊那農業高等学校（カテゴリー1）

優秀賞
呉工業高等専門学校（カテゴリー1）
認定NPO法人日本ファンドレイジング協会（カテゴリー2）
加速キッチン合同会社（カテゴリー3）

グランプリ受賞団体の声

八王子東高校（カテゴリー1・東日本）

八王子東は地域や研究機関と幅広く連携し、地域・グローバルをつなぐ新たなネットワークの中で生徒が自ら学び、自ら考え、自ら創る学びの構築を目指してきた。しかし、近年は感染症対策のために不完全燃焼感の残る取り組みもあり、目標達成の上では課題が残っている。東日本グランプリ選出により、本校の取り組みをさまざまな方々に知っていただくことができた。これをさらなる発展への弾みとして、生徒の心のエンジンを駆動させていきたい。

金融知力普及協会（カテゴリー2）

2020年度「成果発表会グランプリ」に恥じない成長を目指すために、リアビズでは、下記の課題にタックルしてまいります。

・参加者数の拡大→より多くの高校生に学ぶ機会を提供するために、高校の探究の時間にフィットするカリキュラムの開発を進めます。
・基金の設立→効果的に高校生の模擬企業の資金を賄うために、基金を立ち上げたいと考えております。
・知名度の向上→参加者および模擬企業の商品の購入者を増やすためイベントの知名度を上げていきたいと考えております。

引き続き皆さまのご指導をいただきながら、成長してまいります。

北野高校（カテゴリー1・西日本）

「六稜Task Project」が西日本グランプリの栄誉を得た。われわれのProjectの根幹は、本校卒業生を含む多彩な講師陣との「対話」を土台とする、深くアカデミックな探究活動であり、その点が高く評価されたことは、生徒・教員にとって大いなる糧となった。探究活動に関わる生徒・教員は毎年のように入れ替わっていくが、Projectの根幹をうまく継承し、生徒の探究意欲と講師の皆さまの指導意欲が相乗効果を生む仕組みを完成させたい。

大阪大学（カテゴリー3）

カテゴリー3で目指す先端・異能の育成は容易ではない達成目標だと考えます。先端・異能が集まり育つ教育環境をつくるには、大学を挙げてのさまざまな協力、さらには社会との共創が必要だと考えてプログラム作りをしておりますが、多くの方が関わっていただける故の難しさも感じます。

さまざまな価値観や考え方をお持ちの協力者、またプログラムに参加していただいている高校生の皆さんの思いを良い方向にまとめていければと思います。

■シンポジウム開催（2021年12月）

「令和の高校教育に求められる教育プログラムとは」をテーマに初めてシンポジウムを開催した。

平野理事長のあいさつの後、荒瀬克己氏（独立行政法人教職員支援機構理事長）による基調講演を実施し、藤田常務理事からはGood Practiceのポイントを紹介。また、鈴木寛氏（東京大学・慶應義塾大学教授）をモデレーターに笹のぶえ氏（全国普通科高等学校長会事務局長）、進藤修一氏（大阪大学副学長）、菅沼尚氏（長野市立長野高校校長）、今村久美氏（認定NPO法人カタリバ代表理事）によるパネルディスカッションを開催した。当日ならびに後日の視聴者数で500人を超える方々に視聴いただいた。

※上記役職名はシンポジウム開催当時

メディア関連

雑誌「月刊高校教育」（学事出版）、「Career Guidance」（リクルート社）、日本教育新聞には財団の助成事業等について広告を掲載。雑誌「カレッジマネジメント」（リクルート社）には平野理事長からの寄稿記事が掲載された。

また、2021年末には記事広告として「日経ビジネス」（日経BP社／Web版含め）に平野理事長と日経ビジネス発行人の対談を掲載した（対談の内容は、財団ホームページにて掲載）。

12月に行ったシンポジウムについては、日本教育新聞および読売新聞に掲載された。一方、保護者向けとして読売中高生新聞にもシンポジウムの概要を記事広告として出稿した。

雑誌「Career Guidance」
2021年8月掲載

雑誌「月刊高校教育」
2022年2月掲載

日本教育新聞 2022年3月掲載

Special Talk
みらい×育成
座談会

探究学習とSTEAM、分野横断の交流から生まれる未来の教育のカタチ

3年間の応募総数は774件。その中から採択された220件の助成先。
高校・大学・研究機関・教育事業者など対象の広がりとともに、次第に内容も多岐にわたってきました。
当財団のアドバイザリーボードメンバーでもあり、さまざまな分野で活躍する教育者の3人の方々に、
助成プログラムを通じて見える日本の教育における課題と未来の可能性について語り合っていただきました。

全ての教科で探究的な見方や考え方を取り入れる

藤田 財団をスタートする準備を進めていた時、有識者として60人くらいの方々にお会いしました。その際お声を掛けさせていただいたのが、八王子東高校統括校長の宮本先生です。財団の助成事業を立ち上げるに当たり、「心のエンジンを駆動させる教育プログラム」として高校の探究学習への支援を掲げたのは、実はその時の宮本先生とのお話によるところが大きかったのです。先生から見て、これまでの財団の活動に対して、どんな印象をお持ちですか？

宮本 最初に「心のエンジンを駆動させる」というキャッチフレーズを聞いた時、「いい言葉だなぁ」と感激しました。本来、学ぶことって強いられてするものではなく、自らが興味を持ち、「なぜ？」「どうして？」と思いながら、まさにエンジンを回して進んでいくものというイメージがあります。ところが高校においては「大学進学」という避けがたい目的もあり、必ずしもその理想だけを追えるものではありません。そんな中で、三菱グループがこういうすてきなフレーズを掲げて支援しようとしているということが、とてもうれしかったのです。

藤田 八王子東高校が探究学習を採り入れて、今年で既に5年目を迎えるわけですが、その間、生徒たちに変化はありましたか？

宮本 ええ、大きく変わりました。最初の頃の生徒たちは、特に探究学習がしたくて本校を選んだわけではありませんから、「なぜ、こんなことを…」と思いながら取り組んでいる生徒も、少なからずいたはずです。ところが、今や「この学校で探究学習をするんだ」という明確な目標を持って入学してくる生徒も増えたので、目の色が違います。そして、そういう本校のような取り組みの話が他校にも広がり、財団のプロジェクトに応募して、もっと探究学習に力を入れようという学校が、全国的に随分と増えてきたのではないでしょうか。

藤田 高校を対象としたカテゴリー1では、3年間で約340校のご応募をいただき、150校超を採択。都道府県で見れば、5県を残すのみとなりました。

宮本久也氏 Hisaya Miyamoto

東京都立八王子東高等学校統括校長、元全国高等学校長協会会長

「この学校で探究学習をする」という明確な目標を持って入学する生徒も増えてきました

ただ少し気になるのは、「総合的な探究の時間」は授業としては週に1時間だけ。探究担当の先生とそれ以外の先生の間で温度差があるのではないでしょうか？

宮本 本来は探究の時間だけでなく、全ての教科において探究的な見方や考え方を取り入れていかなくてはならない。それが最終的な目的なのですが、どうしても「それはそれ、これはこれ」と切り分けた取り組みが多くなってしまう。その辺が今の課題でしょうね。

藤田 そうした課題を解決するための、新たな活動の方向性はありますか？

宮本 この2～3年、新型コロナの流行で、財団の助成を受けている学校同士の直接交流ができませんでした。でもオンラインによる交流は継続させていて、その中でお互いに気になっていた学校と、ようやく直接対面する交流が始まってきました。直接対話すれば、生徒たちも先生たちも俄然刺激を受けるようです。今後さらにコロナ禍が収まって、対面での交流がもっと盛んになれば、さらにいろいろなアイデアが出てくるでしょうし、活動も活発化すると期待しています。また、例えば助成期間の3年間が終了しても、リーダーシップを取れる学校には、指導やアドバイスをする立場として残ってもらうような仕組みがあってもいいですね。さらに高校同士に限らず、例えば高校の先生が大学の取り組みを直接聞きに行くなど、カテゴリーを超えた交流も新たな活動を生むには重要でしょう。

藤田 もう一つ気になっているのは、最初に比べてややパターン化の兆しが見えること。1年目などは、粗削りながらもオリジナリティー豊かなものが多かった。それが、先進校を手本に、例えば学問探究型、SDGs関連や地域課題解決型とか、発表形式でも論文、ポスター発表、行政への提案書など、幾つかのパターンに集約されてきましたよね。

宮本 テーマ的にはSDGsと地域課題の二極化でしょうか。探究の時間にできることって、他にももっとあるんじゃないかなと、私も思います。

日比谷 よくできたプログラムは、多くの学校が見本にしますから、ある程度は仕方ないかもしれません。ただ気を付けたいのは、コンサルティング会社が間に入り、プレゼンテーションの練習までセットになったパッケージ商品的なものもあると聞きます。例えば、募集要項に意識的に新しい視点を加え、「今回はこの部分を重視します」といったオリジナルで考えざるを得ないポイントを設定するなど、採択する側としても工夫が必要ですね。

文系・理系、学校の大小にとらわれない分野横断の教養教育

藤田 なるほど、ありがとうございます。では引き続き、日比谷先生に大学における活動に関して伺いましょう。先生は日本を代表するリベラルアーツカレッジである国際基督教大学で一昨年まで学長を務められました。私は財団設立前から、よくキャンパスにお邪魔してお話を伺っていたのですが、今日は大学におけるリベラルアーツ＝教養教育の重要性などに関してもお話を伺えれば。

日比谷 まずカテゴリー４の中で採択された大学に関して言えば、国立あり、私立あり、それから学部単位、中には百数十人だけを対象とした教養教育プログラムなど、採択先がバラエティーに富んでいますね。「公的な支援は大きな学校じゃないと対象にならないのでは？」と、地方の大学などが諦めているようなところもあり、残念に思っていたんです。ですからぜひ、全国のさまざまな大学に希望を与え続けてほしいし、後押ししてほしいと望んでいます。採択されたプログラムを見直してみて、共通項を探してみたのですが、「グローバル」ということへの意識付けが、まず目に付きます。それから、「課題解決」も重要なポイントですね。「コミュニティーづくり」とか「対話」もキーワードになっていますが、これは現代の教育が「先生が教え込むもの」ではなく、「学んでいる人同士の対話の中から」自分たちで解を身に付けていく形になっている表れだと思います。最後に非常に重要なキーワードとして「分野横断」があります。文系・理系にとらわれない教養教育プログラムが増えてきているのは、とても良い傾向だと思います。

藤田 しかし現状の文科省の大学向け施策などに関しては、未だに専門教育を中心とした議論が目立ちます。なぜ、今、教養教育が重要なのかという議論がもっとなされるべきでは？

日比谷 確かにそう思います。また、現在の大学の数が果たして適正かどうかという議論、さらに首都圏一極集中という問題もあり、大学の役割、数、地域的バランスと、全ての解を求めるのは非常に難問です。この財団の取り組みから言えば、本当にいろ

バラエティーに富んだ採択先これからも全国のさまざまな大学に希望を与え続けてほしい

日比谷 潤子氏 Junko Hibiya

学校法人聖心女子学院常務理事、前国際基督教大学学長

大島まり氏 Marie Oshima

東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授、第95期日本機械学会会長

「日本の教育を変えていく」という新しい刺激をつくり出すこと自体が非常に大きなインパクトになります

いろな大学が採択されていますから、その中で、例えば地方の大学と都市圏の大きい大学が交流するなどの試みも、今と違う視点をお互いに得るという点で重要だと思います。

藤田「分野横断」によって、解決に向かうと思われる課題は？

日比谷 いろいろあるでしょうが、長年言われ続けている、理工系志望女子の少なさなどは最たるものでしょう。これは、高校教育での文系・理系の区別をやめ、大学の入学者選抜の方式も変えなければ永遠に変わらないでしょうが、先ほど宮本先生がおっしゃっていたような、大学と高校のプログラム間での交流機会などは、解決に向けた一つの良いアイデアだと思います。

分野横断型教育によって文系・理系両輪の探究を

藤田 ありがとうございます。それでは、今よりも理工系に進む女子が少なかった時代から、次世代育成オフィスを主催し高校生向けの教育に取り組まれてこられた大島先生にお話を伺います。

大島 私は機械工学を専門とした研究者であり、大学院教育を中心にずっと携わってきたのですが、その分野においても、この10年ほどでずいぶん変化はあったと思います。最近特によくいわれていることに「専門分野に特化していては、グローバルで通用する優秀な研究者にはなれない」ということがあります。そこで注目されるのが「STEAM」（Science、Technology、Engineering、Arts、Mathematicsの頭文字を取った分野横断型教育）。分野横断型の教育においては、日本が特に劣ってるわけでもありませんが、有機的に知識をつなげていく訓練は、確かにやや足りないように思えます。例えば、今や私の専門の「機械工学」の研究においても、最先端の「機械学習」の知識なり、最新の社会ニーズを知るということが、研究にとって大事な要素になっています。しかし、それを知り得る社会との接点の場が少ないことが、現在の大学院教育や研究における課題なのかなと思っています。

これまでは、教育というと国や自治体などの主導が多かったのですが、今やそういう旧態依然とした仕組みでは、膨らみ続ける多様性に対応できなくなっていると思います。ですから、意識の高い企業などがバックアップする形で、「日本の教育を変えていこう」という新たな刺激をつくり出すこと自体が、大学教育だけでなく、初等・中等教育にとっても、非常に大きなインパクトになると期待しています。

藤田 多様性への対応に関して、課題と考えていることはありますか？

大島 一つにはデジタル化への対応があります。実は、もうかなり前から直接対面での学習・教育だけには、限界を感じつつありました。しかし、日本ではICT教育が遅々として進みませんでした。ところがコロナ禍によって一気にデジタル化が進んだことは、皆さんご存じの通りですね。これをきっかけに、デジタル化はさらに進むでしょうが、日本の対面重視文化がなくなることもないと思っています。そして、デジタル化と日本の対面重視文化がうまく融合することで、何かしらのパラダイムシフトが起きるのではないかと、考えています。

藤田 先ほど話題に出た、理系志望に関するジェンダーという多様性に関してはいかがですか？

大島 それももちろん解決すべき重要な問題です。ただ、その解決に関しては、少し楽観的過ぎるかもしれませんが、先ほど申し上げたSTEAMと探究活動が糸口になると思っています。分野横断することによって、理系の裾野は確実に広がります。今までは、数学と物理ができないと理系じゃないと思われましたが、そんなことはない。そういう新しい視点が生まれつつあると思います。

宮本 ただ、それが中高ではなかなか分かりづらいですよね。「工学」という授業があるわけじゃない。結局教科は「理科」「数学」と昔のままだから。

大島 そうなんです。そこに横串を刺して「理系って数学と物理、化学だけじゃないよ」って言われても、実感が湧かないですよね。でも、それが例えば総合的な探究の時間で、社会的な課題と科学技術的な部分が両輪として機能することを、初等・中等教育の中で伝えていけば、苦手意識はなくならなくても、勉強のきっかけにはなる。そういう意識付けとしてSTEAM教育や総合的な探究の時間は必要だと思います。

宮本 大島先生がおっしゃったように、STEAMや探究の時間っていうのは、教科の横串を刺すにはとてもいいフィールドですよね。うちの学校もさまざまなテーマで探究をやっており、大学の先生や企業の方に来てもらって、いろいろな話をしてもらいます。先日は専門家を呼んでデータサイエンスについてお話を聞きましたが、これこそ文系も理系も関係ない。皆、目を輝かせていました。いろいろな発想も飛び出したし、生徒は早速タブレットを使ってさまざまなデータを拾ってきたりしてました。ただ横串を刺せる学校、刺せない学校があるでしょうね。学校に外部の方を呼び込む余地がないと難しい。同じような話を教師がすればいいと思うでしょうが、教師じゃダメなんです。どうしても授業になっちゃう。

藤田 余談ですが、データサイエンスって、今結構流行りですよね、大学によっては学部を作っています。「データサイエンス学部」と聞くと面白そうだけど、結局「統計」だったりする。ビッグデータをどう社会の課題解決に使うのかというアプローチ、例えばコンビニの自動発注プログラムはどうなっているとかだったら、関心を持ってくれそうだけれど、いきなり「多変量解析」なんて言われると苦手意識が顔を出す。

日比谷 それは新学部を作るときは、まずは学術的なバックグラウンドを重視して教員を探しますから。でも今のコンビニの話なんて、高校生にも大学生にも、すごくアピールしますよね。「コンビニにいつもアイスクリームがあるのはなぜか」とか、その辺から問いを立てていく。店長さんが鉛筆なめながらやってるわけはない、と。そういう身近な事例から、この問いにはどういう学問が必要かと考えていけばよいのですが、まず最初に「何を専攻しますか？」というところから始まるから、「理系嫌い！」になっちゃう。

大島 女子なら同じアプローチをすればいいというものでもないし、男子もそう。そうするとどこまで個別最適ができるかに行き着きます。カリキュラムマネジメントが非常に重要で、そこをどう解決して、どこまで個人に寄り添っていけるかということですよね。学校における温度差、教員における温度差、それをバックアップする仕組み。やはり人を含めた解決策が必要ではと思っています。

藤田 皆さん、ありがとうございました。

（敬称略）

Chapter 3

「心のエンジンを駆動させる教育プログラム」分析レポート

2022年3月に実施された、兵庫県立御影高校（左）と、岡山学芸館高校（右）による交流発表会。外部との発表・交流の場は、生徒に新たな発見と刺激を与えている。

2020~2022年度までの助成件数は220件、対象人数は約12万人にも上ります。
助成期間中、財団メンバーは各助成先を回り、「心のエンジンを駆動させるプログラム」の現状や課題のリサーチを重ねました。
また2020・2021年度のカテゴリー1助成先の皆さまにご協力いただき、
生徒の資質·能力、意識の変化の「見える化」リサーチを開始しました。
その結果を紹介いたします。（藤田 潔 常務理事）

高校生対象の「心のエンジンを駆動させるプログラム」への助成に至った経緯

財団の助成事業を始めるに当たり、数多くの有識者にヒアリングを行った結果、「課題は高校と大学」であること、特に高校の現場では前向きにさまざまな物事に取り組む生徒が1～2割、真面目ではあるが万事受け身の生徒が7～8割という二極化の構造にあることが大きな課題であると認識した。自分の人生を切り開いていくためには人から言われたことだけをやるのではなく、まず「何になりたい」「これをやりたい」というような志を立て、そして自分でそうなるためには何をやるべきかを考え、自分で工夫をして努力を重ねることが肝要である。将来より良い人生を大人として歩んでゆくために**「生徒が自ら主体的に考え、動く」ための教育プログラム**が今必要ではないかと考えた。ある大学教授から「上記の受け身の高校生は心のエンジンが駆動していない」というコメントを聞き、この名称を冠することとした。

ちょうど2022年度の高校の学習指導要領改訂で「主体的で対話的な学び」がうたわれ、探究学習を導入することとなったが、生徒の外部視察の交通費、講師への謝礼金、発表会の開催費やICT関連費用等今までにない追加の費用がかかるが、県の教育委員会は資金手当てが難しいという現状もあり、民間である当財団が助成をしようと考えた。

Good Practiceの四つの条件とは

2020·2021年度とも各都道府県の教育委員会と校長会の会長校長を訪問し、助成事業について説明を実施、チラシも配布し結果としては20・21年度は合計240校以上の応募の中から106校の採択を行った。進学重点校、中堅校、実業高校、高専と校種もさまざまな学校が採択されている。

コロナ禍ということもあり、オンライン視聴も含めて7割くらいの学校の成果発表会を財団メンバーが手分けして見学を実施したところ、以下の傾向が分かってきた。

学校によって探究学習のタイプが異なり、進学校での取り組みは、大学での学びに近い「人文、社会、自然科学、芸術等の分野から生徒がチームあるいは個人で、テーマを見つけ、問いを立てて先行文献を読んだり外部にアドバイスをもらったりしながら発表にまとめる」、いわゆる「学問探究型」と、地域や社会の課題を提示され、それに関する解決策をチームで考え、提案書の形にまとめて発表する「PBL型」に大きく分けられるのではないかと考える。このケースはSDGsのテーマとの関連で地域課題を深掘りするなどが多い。それ以外では高等専門学校等では技術実装型の実験·提案というケースもあった。

われわれが見学したのは成果発表会の機会のみではあるものの、発表内容よりもそこに至るプロセスでどのようなことを行ってきたかなどを中心に見た結果と毎年開催している交流会で提起された課題を踏まえ、Good Practiceのポイントとしては以下の4点があるのではないかと考える。

1 生徒が自分事として考えているか

興味·関心を持って取り組んでいることが重要であり、学問探究型ではこれが一番の課題である。具体的な事例紹介をさまざまな形で行う中で、生徒が選ぶパターンが多かった。PBL型は課題がある程度決まっているので、「自分事」として考えるには地域社会の身近な事例をフィールドワークを通じて発見するということが一番の近道であろう。そしてできれば自分の将来に何らかの形でつながるようにテーマを絞り込むなど、先生のガイドが必要であるように思う。

2 外部の社会人のプログラムへの関わり

「学問探究型」の取り組みでは生徒が興味·関心を持つテーマを考える「場」を学校がどのように工夫しているかという点では以下三つに大別される。

●ある程度ジャンルを指定してみて自分が興味のあるテーマを調べてみる
●先輩の研究発表を後輩が事前に聞く、過去のテーマ集一覧を見る
●外部の社会人·大学生や大学院生からテーマ設定の段階や中間発表でコメントをもらうなど

特に効果的なのが、卒業した先輩大学生·院生·社会人が、年数回学校に来て生徒たちの相談相手になっているケースである。後輩への思いや熱もあるし、ある種生徒にとっても身近なロールモデルにもなるのでとても良い教育効果を生んでいると感じた。

また、同じことが地域課題のPBLのケースでも言える。今まで自分が住んでいる地域のことを高校生はほとんど知る機会はなく、そういう意味で身近な地域課題を知る良い機会になっており、フィールドワークでさまざまな大人と話してみると皆親身になって話をしてくれる。ただ、テーマが「過疎化対策」のように大き過ぎて打ち手が考えにくいなどの場合にはもう少し具体的なテーマにブレークダウンさせる必要がある。社会人の参加は、高校生にとっては「本物の大人」に会う経験であり、極めて有効である。「学問探究型」と同様に卒業生が効果的だが、特に大学院生のコメントは年齢差も少ないこともあり、生徒に響くという点で探究学習プログラムへのアドバイザーとして望ましいと思われる。

3 さまざまな場での発表とディスカッション

発表の場は、自分の思考が熟成する良い機会である。日本の高校教育の現場では、欧米の高校生との比較で見てもディスカッションの機会が少ない。意見を闘わせる場をつくり、論を張ることは思考力·表現力を育てる意味でも重要であろう。

4 学校内の取り組み体制

校内分掌として、探究企画部のような組織を中堅若手の先生を中心に組成しており、学年主任の先生等も協力的であるとプログラムの充実度が違うように思う。

カテゴリー4として「21世紀型 教養教育プログラム」を推進する10大学に助成を行っており、その大学の先生方が口をそろえて「正解を求める高校までの学びは、正解のない問いに向き合う大学での学びと全く違う」「自ら探究する若者こそが大学が求める人材であり、入試もどんどんそういう方向に変わるはずである」と話す。現に東北大学は30%が総合型選抜であり、こうした流れは今後加速していくであろう。自ら「学び問う」のが学問であり、既存の教科学習でも探究学習的手法で学びを深めることが求められている。

大分県立大分上野丘高校は2021年度から5万人もの卒業生とのネットワークの強化に取り組んでいる。その一環として3年生を対象に、東京大学に進学した卒業生と1泊2日のグループセッションを実施。その後の生徒たちの学習意欲に大きく影響したという。

「心のエンジンを駆動させるプログラム」をテーマに各高校で生徒のアンケート調査を実施

教育プログラムの「成果評価」の定量化はなかなか難しいのが現実であるが、たまたま文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」において、高校を対象に実施していたアンケート調査の内容が、当財団の助成事業にも適用できるのではないかと考え、シンクタンクである三菱UFJリサーチ&コンサルティング（MURC）に、カテゴリー1の助成先学校へのアンケート調査を委託した。

調査のスキーム

本調査の名称である「高校魅力化評価システム」は、生徒の資質・能力・意識の変化を「見える化」することを目的とした調査であり、また、教員等が現状の取り組みを「見える化」するためのツールであることが特徴となっている。

75問の設問を生徒に回答してもらうもので、以下の五つに分けて設定している。

❶生徒の学習活動　❷地域の学習環境　❸生徒の能力認識（自己評価）
❹生徒の行動実績　❺生徒の満足度

この中に生徒の資質・能力・意識について、「主体性」「探究性」「協働性」「社会性」の四つの視点を盛り込んでいる。

縦横のマトリックスで整理をしており、この四つの視点と「学習活動」「地域の学習環境」といったインプット指標、「能力認識」「行動実績」「満足度」といったアウトプット指標を幅広く盛り込んでいる。

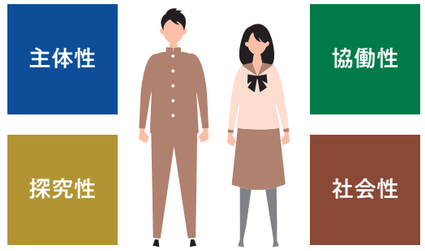
■2020・2021年実施アンケート調査概要

調査期間	2020年8月3日（月）～10月9日（金）／2021年8月3日（火）～12月31日（金）	
調査対象	「カテゴリー1：心のエンジンを駆動させるプログラム」採択校 2020年：50校（うち、高等学校42校、高等専門学校8校） 2021年：採択校105校（うち、2020年助成開始校50校、2021年助成開始校55校） ❶生徒・学生向け調査:原則として各校のプログラムに関わる全生徒・学生を対象 ❷大人向け調査（希望校のみ）:プログラムに関わる大人のうち10～30人を目安として回答	
回収状況	2020年 ❶17,619人（回答率81.5%） ❷728人（実施校43校、1校当たり平均17人）	2021年 ❶39,370人（回答率77.7%） ❷1,301人（実施校83校、1校当たり平均16人）

■三つの側面・四つの領域から、「生徒の資質・能力」の伸びを見える化

三つの側面から

四つの領域から



以下は、生徒用質問の一部の事例である。「最近の生活全般への満足度」を0（最低）～10（最高）の数値で答える質問の他は、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」の４段階で回答。「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」に回答した生徒の割合を「肯定的回答割合」として各校に還元している。

質問事例１　学校をはじめとする普段の生活において、あなたの周囲（学校や地域社会）に関する次のことはどれだけ当てはまりますか。

【回答に当たって】●高校１年生は、あなたの中学校生活についてお答えください。●高校2・3年生は、あなたの高校生活についてお答えください。
※質問の中に出てくる「人」とは、あなた自身だけでなく、広く周りの生徒や大人（先生も含む）も含みます。また、「大人」とは、家族以外の、学校生活や地域生活で接する大人（先生を含む）のことを指しています。

1	本音を気兼ねなく発言できる雰囲気がある
2	将来のことや実現したいことを話し合える大人がいる
3	地域から大切にされている雰囲気を感じる
4	失敗してもよいという安全・安心な雰囲気がある
5	挑戦する人に対して、応援する雰囲気がある
6	人と違うことが尊重される雰囲気がある
7	ありのままの自分が尊重される雰囲気がある
8	周りの大人は、じっくりと話を聞き、考える手助けをしてくれる
9	地域の人や課題など、興味を持ったことに対してすぐに橋渡しをしてくれる大人がいる
10	自分が何かに挑戦しようと思ったとき、周りは手を差し伸べてくれる
11	自分と異なる立場や役割を持つ人との関りがある
12	立場や役割を超えて協働する機会がある
13	地域の人や課題などにじかに触れる機会がある
14	人の挑戦に関わらせてもらえる機会がある
15	お互いに問い掛け合う機会がある
16	自分の暮らす地域を、外からの視点で考える機会がある
17	目標や当事者意識を持って挑戦している人がいる
18	地域に、尊敬している・憧れている大人がいる

質問事例２　あなたに関して、次のことはどれだけ当てはまりますか。

1	うまくいくか分からないことにも意欲的に取り組む
2	家や寮で、誰かに言われなくても自分から勉強する
3	現状を分析し、目的や課題を明らかにすることができる
4	目標を設定し、確実に行動することができる
5	複雑な問題を順序立てて考えることが得意だ
6	相手の意見を丁寧に聞くことができる
7	自分とは異なる意見や価値を尊重することができる
8	共同作業だと、自分の力が発揮できる
9	情報を勉強したことや知っていることと関連付けて理解することができる
10	勉強したものを実際に応用してみる
11	忍耐強く物事に取り組むことができる
12	自分を客観的に理解することができる
13	自分の考えをはっきり相手に伝えることができる
14	友達の前で自分の意見を発表することは得意だ
15	自分には良いところがあると思う
16	私は、自分自身に満足している
17	自分で計画を立てて活動することができる

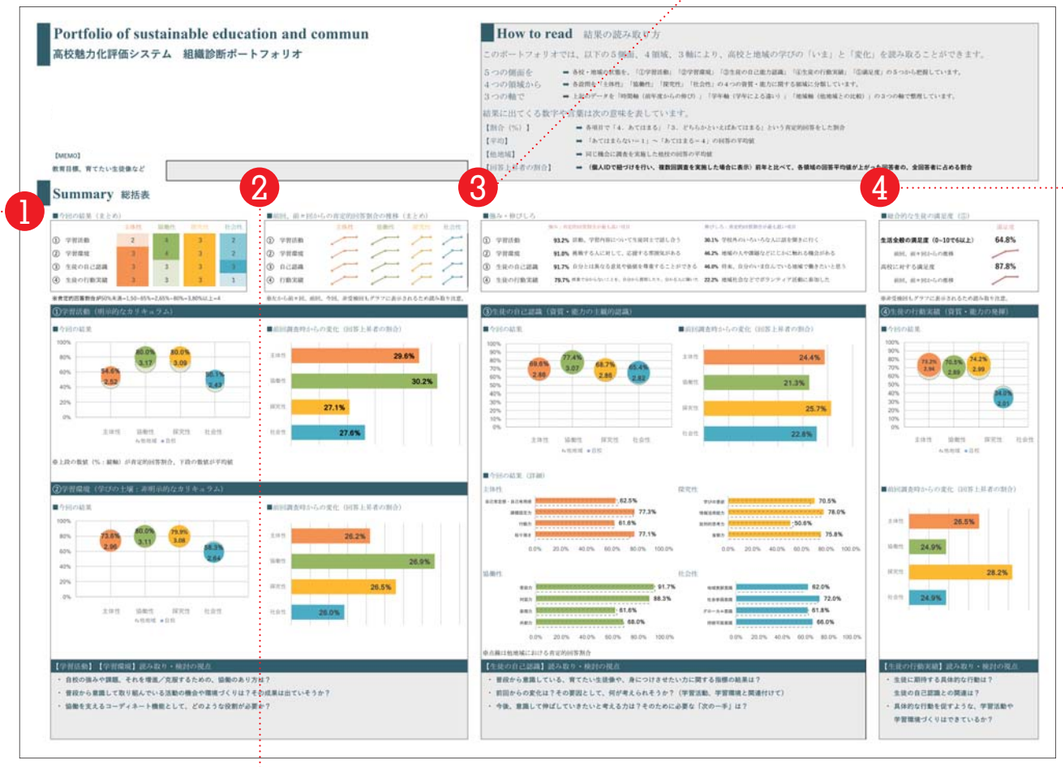
■調査結果

学校ごとかつ学年ごとの設問ごとの集計結果と、「学校が行うインプット」と「生徒が行うアウトプット」に分けて分析を実施。2年継続してアンケートを実施した学校は学年の経年変化と各学年の年度評価結果が分かる仕組みとなっている。

結果としては、選考に当たって多様性を重視した結果、学校ごとに各スコアのばらつきが大きく、平均値との比較は適切ではないこと、主体性や探究性のスコアが高い学校は財団メンバーが見学した折でも良い取り組みと思われることが多かったこと、また1年経過によるスコアの伸び率が高い学校については学校側の取り組みが確実に効果を上げていると思われること、また、地域との関わりが深い学校と「社会性」のスコアに正の相関が見られること、上記のGood Practiceの4ポイントから見て明らかに何かが足りないと思われる取り組みはスコアが低調となっているなどが伺えた。

この調査は文科省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」対象校の結果や当財団の助成先平均の各項目と比較して、プラス・マイナスの乖離が見られる点に注目することで、学校ごとに何を課題として改善していったらよいかが分かる仕組みとなっている。

■各校にお渡ししているアンケートの結果

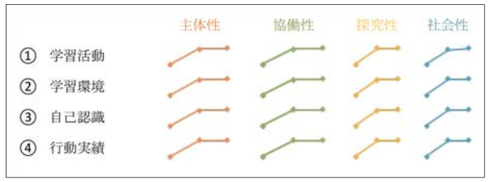


1 ■今回の結果（まとめ）

	主体性	協働性	探究性	社会性
① 学習活動	2	4	3	2
② 学習環境	3	4	3	2
③ 生徒の自己認識	3	3	3	3
④ 生徒の行動実績	3	3	3	1

「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」という回答を「肯定的回答」とし、その割合が50%以下の場合は「1」、50～65%（生徒の半数以上）を「2」（生徒の半数以上）、65～80%（約3分の2以上）を「3」、80%以上（5分の4以上）を「4」と四つに段階分けしている。

2 ■前回、前々回からの肯定的回答割合の推移（まとめ）



年度ごとの傾向の推移を示した折れ線グラフ。この事例は一昨年度と昨年度の比較では全ての側面（縦の項目）・領域（横の項目）において伸びているが、昨年度と今年度の比較では伸びが鈍化している。

3 ■強み・伸びしろ

	強み：肯定的回答割合が最も高い項目		伸びしろ：肯定的回答割合が最も低い項目	
① 学習活動	93.2%	活動、学習内容について生徒同士で話し合う	30.1%	学校外のいろいろな人に話を聞きに行く
② 学習環境	91.0%	挑戦する人に対して、応援する雰囲気がある	46.2%	地域の人や課題などにじかに触れる機会がある
③ 生徒の自己認識	91.7%	自分とは異なる意見や価値を尊重することができる	46.0%	将来、自分のいま住んでいる地域で働きたいと思う
④ 生徒の行動実績	79.7%	授業で分からないことを、自分から質問したり、分かる人に聞いた	22.2%	地域社会などでボランティア活動に参加した

肯定的回答割合が最も高い項目を「強み」、最も低い項目を「伸びしろ」として挙げている。各校によって、目標としている指標が異なるため、「伸びしろ」として挙げた項目を必ずしも伸ばす必要はなく、あくまでも各校の特徴を「見える化」したもの。

4 ■総合的な生徒の満足度（⑤）

	満足度
生活全般の満足度（0~10で6以上）	64.8%
前回、前々回からの推移	
高校に対する満足度	87.8%
前回、前々回からの推移	

生活全般の満足度と高校に対する満足度の年度ごとの推移を表したもの。生活全般の満足度は、さまざまな制約を生んでいる新型コロナの影響や家庭の事情もあり、学校側がコントロールすることは難しいと推測される。

全体に共通して、「学習環境」を軸に「主体性」「協働性」「探究性」「社会性」で上位となっている高校はクロス集計の結果、「生徒の自己認識、行動」においても上位となっている高校が多いことが分かった。MURCが財団の調査とは別に行っている同様の調査でも、「学習活動」「学習環境」の上位と、「生徒の自己認識、行動」の上位の関連は出ている。一方で、「学習活動」が上位でも「学習環境」が低いと、「生徒の自己認識、行動」は低くなるという傾向も見られる。つまり、「どのような学習活動をするか」に加えて、生徒が主体的にチャレンジできる、他者と協働できる、また周囲の大人が応援するような環境が充実しているなど、学習活動を「どう実施するのか」という面もそろわないと、「生徒の自己認識、行動」の伸びは期待できない。活動内容と共に、生徒が伸び伸びと学習ができる環境づくりが重要である。

■2021年度　肯定的回答割合

学習活動	最小値	最大値	平均
主体性	32.0%	85.7%	51.3%
協働性	50.1%	93.3%	73.1%
探究性	45.6%	97.1%	72.7%
社会性	24.7%	85.7%	46.5%

※平均値は2020年度と比較し0.3～2%程度の上昇

学習環境	最小値	最大値	平均
主体性	58.6%	88.1%	74.7%
協働性	60.4%	92.9%	79.3%
探究性	63.8%	92.1%	79.4%
社会性	44.3%	85.0%	61.1%

※平均値は2020年度と比較し2%程度の上昇

自己認識の変化	最小値	最大値	平均
主体性	50.8%	76.8%	67.4%
協働性	60.3%	81.7%	74.4%
探究性	45.7%	77.8%	67.9%
社会性	47.2%	80.3%	63.0%

※平均値は2020年度と比較し1～2%程度の上昇

行動の変化	最小値	最大値	平均
主体性	46.0%	78.7%	68.4%
協働性	47.6%	87.1%	70.0%
探究性	41.0%	82.4%	68.1%
社会性	23.4%	59.0%	38.3%

※平均値は2020年度と比較し、0～2%程度の上昇

生徒の満足度	最小値	最大値	平均
生活満足度	64.6%	98.8%	85.8%
学校満足度	40.8%	77.8%	65.7%

※生活満足度はほぼ横ばいで、学校満足度は上昇

個別の結果は割愛するものの、上記が21年度の「学習活動」「学習環境」「自己認識の変化」「行動の変化」「生徒の満足度」についての肯定的回答割合の分布である。

最小値と最大値の乖離が大きい項目があり、学校によって大きな違いが見られ、平均値だけを見ては分からない結果となっている。従って、調査全体結果よりも個別の学校の結果をそれぞれが分析して改善につなげることが効果的であると考える。

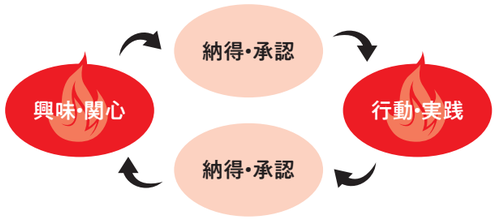
調査結果から見えてきた「心のエンジンを駆動させる」要素とは

前ページの結果を踏まえ改めてMURCにお願いし「心のエンジンを駆動させる」要素と生徒の変容について仮説の構造化を依頼した。

2020年度助成校の生徒の「心のエンジン」をめぐる変化についてインタビューを実施したところ、「心のエンジン」を駆動させる着火点が二つあるということが分かってきた。一つ目が、本人が持つ「興味・関心」。二つ目に、「まず行動・実践」ということが挙げられる（下図参照）。

そして、いずれのケースでもさまざまな大人との出会いや対話によって、自分が「納得する」あるいは大人に「認められる」という経験がこの二つの着火点をつないで、エンジンンが駆動し続けるのではないかという仮説を立てている。

「納得・承認」が介在することで着火点の往還を促進
モチベーションと学びが持続的なサイクルに
＝
心のエンジンの駆動



心のエンジンの駆動によって、生徒は探究的な学びの中で興味・関心を広げ、行動・実践を重ね、自分の中での「納得感」を高めていく。この心のエンジンを駆動させるプログラムが、高校での学びといった「現在」の状況を変える成果を生んでいる。

また、心のエンジンの駆動は、生徒の未来の見通しも変えている。探究テーマで選んだテーマをさらに追求するために進学先を主体的に選択したり、留学先を決めたり、といったことが起きている。また、現場からは、従来その高校では選択しなかったようなキャリアを切り開いていく生徒が現れている（未来の拡張）との報告もある。

こうした事例を踏まえると、心のエンジンの駆動は、現在の状況、未来の見通しの拡張にとどまらないのではないかと考えている。それが、「過去の自分に対する評価の見直し」である。別の高校に入りたかった生徒や、自分に自信のなかった生徒が、この学校で学ぶ意義、意欲を見つけることで、自身の過去をポジティブに意味付け、意識が変わっていくことが現場から報告されている。過去の自分に対する評価が変わることで、自らについて考える出発点が変わる。これにより、未来の見通しもより拡張していくと考えられる。

心のエンジンが過去の自己評価を変える

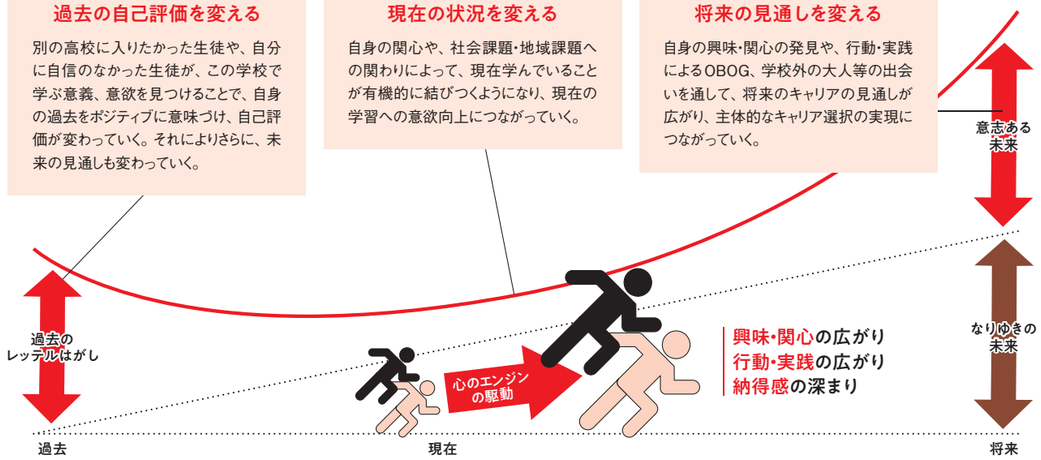
別の高校に入りたかった生徒や、自分に自信のなかった生徒が、この学校で学ぶ意義、意欲を見つけることで、自身の過去をポジティブに意味づけ、自己評価が変わっていく。それによりさらに、未来の見通しも変わっていく。

心のエンジンが現在の状況を変える

自身の関心や、社会課題・地域課題への関わりによって、現在学んでいることが有機的に結びつくようになり、現在の学習への意欲向上につながっていく。

心のエンジンが将来の見通しを変える

自身の興味・関心の発見や、行動・実践によるOBOG、学校外の大人等の出会いを通して、将来のキャリアの見通しが広がり、主体的なキャリア選択の実現につながっていく。



「心のエンジンが駆動する瞬間」の事例

MURCのメンバーが「心のエンジンが駆動する瞬間」について2020年度助成先の12校の探究担当責任者や一部生徒にもヒアリングを実施した。その中から、幾つか「心のエンジンが駆動する瞬間」の事例を紹介する。

A高校（九州）

外部の評価が生徒の自信につながる

関心のある分野の専門家や第一線で働いている方々の言葉が、生徒たちに響くことがあり、その内容が教員の話と同じと気付くと、ふに落ちるようだ。探究活動の時、生徒たちは間違いなく生き生きしている。地域の方々と触れ合う中で、「地域のためにこんなことをしてくれるんだね」という言葉をもらい、承認してもらうことで、自信を持てている。そこが探究の大事なところだろう。

B高校（関東）

“くだらないこと”が熱中のきっかけに

「探究のテーマは、シンプルで簡単で一見くだらなく見えるものでもよい」という説明をしたところ、「ポケモン」でもいいのかと聞いてきた生徒がいた。色が進化して変わる出現率がネットの数値とリアルな確率がどう違うかを、実際にやって変化率を見るというもので、数学的な確率・エビデンスの要素を入れて探究を進めた。興味を持ったものを突き詰めるという学習をしたせいか、その後の成績は飛躍的に伸び、志望先も東京大学に変え、合格。過去の自分を振り返ると、熱中していたことはくだらないことだったりするが、そこから問いを見つけたりもでき、心のエンジン駆動につながったりもする。

C高校（九州）

探究型学習は、学校と社会の「懸け橋」

キャリア教育と併せて実施している探究の授業は、学校と社会の「懸け橋」であると思っている。橋を渡る中で、実際の社会、大人と出会い、言葉に触れることで、社会がどうなっているのかをじかに感じる。そこから自分の将来に対する見通し、今の勉強に対する姿勢などが変わっていく。例えば、フィールドリサーチの中で国際協力機構（JICA）を訪問し、社会課題に対する問題意識と共に、自分の将来のキャリアについての意識も高め、将来JICAに就職できるように準備を始めている生徒もいる。

D高校（中部）

生徒の魅力の発掘につながる

学業は不振だがイラスト好きな生徒が探究のテーマに選んだのは「街中にあるアーティスティックな落書き」。写真を撮って丹念に分析する姿を見て、教員は当初抱いていた懐疑的な見方を改め、クラスメートを含めて「将来何かなすかもしれない」という認識へと変わっていった。学業は変わらないが、探究活動がその生徒の魅力の発掘につながったという手応えを感じている。

E高校（甲信越）

一つの体験によってエンジンが駆動し続ける

明るく元気もよいが、もともと成績上位ではなかった生徒が、ざざ虫（食用昆虫）の漁体験をし、漁師から川の変化や漁の減少などの話を聞いたことで、地域課題に関心を持つようになり、自分で養殖を始めた。専門家とコンタクトを取って、環境問題・SDGsとひも付けたテーマとして探究を深め、ドキュメンタリー映画のテーマになったり、NHKのクイズ番組にも出場した。大学生となった現在は、地域の伝統分野・環境・文化にも関心を持って町づくりを学んでいる。

いずれの学校も「探究する学び」に生徒が主体的に取り組める環境づくり、アドバイスを行い、結果を見ながら改善を加えていくプロセスを踏んでいるが、やはり生徒があるテーマに熱心に取り組み、外部と関わりながら考えたことを発表することは間違いなく本人の自信になり、自らのキャリアを切り開いていくきっかけになる。心のエンジンが駆動すれば、後は自分で回り始め自ら学び続けることにつながっていくものと確信している。

上記の例以外にもさまざまな個性を持った生徒がこの学びを通じて変容する姿を目の当たりにすることが、先生たちの納得感にも確実につながっている。

いずれにしても探究学習は始まったばかりである。他教科と異なり探究学習プログラムは学校独自の教育プログラムとして進められるという点で、学校ごとに策定する「育てるべき生徒像」やスクールポリシー、ミッションに大きく関わってくると思われる。各学校の皆さんには交流会を通じて先生方から提起された現場での課題（教科との関係、受験との関係、教員の意識と学校内の組織体制、保護者の意識等）と向き合いながら引き続きプログラムの改良を続け、生徒の心のエンジンを駆動させていただきたいと考える。

Chapter 4

2022年度 助成先一覧

カテゴリー1

※都道府県順

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	対象者数	助成額
2021	北海道鵡川高等学校	北海道勇払郡	むかわ学プロジェクト	150名	200万円
2022	北照高等学校	北海道小樽市	ふるさとを支える人材を小樽で育てる探究活動	205名	100万円
2022	北海道岩見沢東高等学校	北海道岩見沢市	「潜在能力（Capabilityケイパビリティ）を掘り起こす」プログラム ～井の中の蛙、大海に飛び出そう!!	400名	200万円
2022	北海道大空高等学校	北海道網走郡	「3つのPをベースとしたPBL」（1年次「問題発見力」 2年次「問題解決能力」を育む2年間の教育プログラム）	69名	100万円
2021	岩手県立高田高等学校	岩手県陸前高田市	T × ACTION	276名	200万円
2021	岩手県立盛岡第一高等学校	岩手県盛岡市	「M探」Plus Science and English	840名	200万円
2022	専修大学北上高等学校	岩手県北上市	「SENTAN-専探-」カリキュラム内の探究的な学びと課外での 自己深化型学習をつなげるプログラム	515名	200万円
2020	宮城県仙台二華高等学校	宮城県仙台市	北上川/東北地方、メコン川/東南アジアをフィールドとした 世界の水問題解決のための取り組み	480名	200万円
2020	宮城県仙台南高等学校	宮城県仙台市	公孫樹プログラム～実践的課題意識、課題解決力の育成～	840名	84.9万円
2020	宮城県宮城第一高等学校	宮城県仙台市	オール宮城で育てる未来を拓くグローバル人材の育成	560名	200万円
2021	宮城県宮城野高等学校	宮城県仙台市	自他の「しあわせ」のための「未来デザイン力」育成プログラム	800名	200万円
2021	宮城県仙台第二高等学校	宮城県仙台市	北陵グローバルゼミ	320名	100万円
2021	宮城県南郷高等学校	宮城県遠田郡	地域支援活動『とどけよう 花と笑顔と 南郷魂』ボランティア活動を 通じて地域に貢献し、学び楽しみ続ける生徒を育成するプログラム	74名	100万円
2021	宮城県気仙沼高等学校	宮城県気仙沼市	海を素材とするグローバルリテラシー育成 ～世界を舞台に活躍するスケールの大きな人材を目指して～	700名	197.7万円
2022	宮城県石巻西高等学校	宮城県東松島市	震災を乗り越え持続可能な未来社会を創造する市民の育成プログラム	477名	190万円
2022	山形県立山形東高等学校	山形県山形市	「山東探究塾」～地域・日本・世界で活躍するグローバルリーダー／ 困難な課題に立ち向かうイノベーターの育成をめざして～	720名	200万円
2022	山形県立新庄北高等学校	山形県新庄市	LINKネクスト～最上の地で最上の知恵～	300名	153万円
2022	山形県立酒田光陵高等学校	山形県酒田市	特色ある専門学科の実践及び学科を超えた協働による総合力と 世代間交流により限界集落離島飛島の課題解決を目指すプログラム	311名	200万円
2020	福島県立葵高等学校	福島県会津若松市	生徒の主体的に生きる力の育成 ～課題探究活動「葵ゼミ」をとおして～	400名	200万円

※都道府県順

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	対象者数	助成額
2021	福島県立磐城高等学校	福島県いわき市	地域トップリーダー育成のための探究プログラム	840名	200万円
2022	学校法人福島成蹊学園 福島成蹊高等学校	福島県福島市	地域に根差した問題を生徒の目線で考える探究活動 ～自分たちの手で採集した微小生物の有効利用を目指して～	50名	100万円
2020	国立高等専門学校機構 小山工業高等専門学校	栃木県小山市	SDGsにアプローチする学年進行探求型STEAM教育を基盤とした 未来実装型スーパーリカレント教育プログラム	400名	200万円
2020	栃木県立宇都宮高等学校	栃木県宇都宮市	課題研究Ⅰ・課題研究Ⅱ	560名	95.9万円
2021	栃木県立佐野高等学校	栃木県佐野市	Sanoグローカル構想　田中正造型グローカルリーダーの育成	480名	198.5万円
2021	栃木県立足利清風高等学校	栃木県足利市	『学び楽しむ』～内から外へ 自ら超える“挑戦と自律”～	196名	100万円
2021	栃木県立宇都宮女子高等学校	栃木県宇都宮市	キャリア形成に資する探究活動	560名	200万円
2022	栃木県立日光明峰高等学校	栃木県日光市	「日光学NEXT」～世界遺産と国立公園が私たちの学び場です～	53名	100万円
2020	群馬県立館林女子高等学校※1	群馬県館林市	館女の女性学 ～女性の生き方探究～	（600名）	（200万円）
2020	高崎市立高崎経済大学 附属高等学校	群馬県高崎市	TSUBASAプロジェクト ～高崎市と世界をつなぎ、地域に貢献できる人材の育成～	840名	200万円
2020	群馬県立高崎女子高等学校	群馬県高崎市	「総合的な探究の時間」における、 自己を見つめ、主体的・自律的に取り組む課題研究	560名	200万円
2022	群馬県立大間々高等学校	群馬県みどり市	SDGsみらい探究 ～地域、社会の課題解決に向けて主体的に取り組み、 貢献できる生徒の育成～	351名	156.1万円
2020	筑波大学附属坂戸高等学校	埼玉県坂戸市	高校生Social Change Student養成プログラム ～自分の学びをデザインしつづける力の育成を目指して～	100名	100.5万円
2020	埼玉県立浦和高等学校	埼玉県さいたま市	浦和高校「総合的な探究の時間」	1,080名	200万円
2021	埼玉県立 浦和第一女子高等学校	埼玉県さいたま市	未来のための「女性学」探究プロジェクト ～To the next stage of our project based learning～	1,078名	200万円
2020	東京都立五日市高等学校	東京都あきる野市	課題解決力の高い地域人を育成する「五日市メソッド」	480名	100万円
2020	東京都立大泉高等学校	東京都練馬区	Quest & Creativity ― 創造の泉を見つける ―	320名	200万円
2020	筑波大学附属高等学校	東京都文京区	筑波スタディ ～「伝統」と「連携」がひらく、社会へむかう探究の扉～	480名	200万円
2020	東京都立成瀬高等学校	東京都町田市	成瀬BB!プロジェクト	840名	200万円
2020	東京都立八王子東高等学校	東京都八王子市	世界と地域の協働により課題解決に挑む力の育成	640名	200万円
2020	東京都立本所高等学校	東京都墨田区	「本所の探究 ～2030年を見据えた挑戦～」SDGsを視野に入れ、 自分の興味関心のあることを探究していくプロセスを通して、 自ら考え行動し、自己の生き方在り方を見つめ、 より良く社会を生き抜く力を育てる探究学習	480名	200万円

※1　20/21年度のみ（掲載データは21年度）

2022年度 助成先一覧

※都道府県順

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	対象者数	助成額
2020	東京都立三田高等学校	東京都港区	「知的探究イノベーター推進事業」	560名	196万円
2020	私立武蔵高等学校中学校	東京都練馬区	総合的な探究の時間を利用した「自調自考のエンジン」を 身に付けさせる多様なコース制による課題解決型学習	100名	150万円
2020	東京都立両国高等学校	東京都墨田区	Bridge～世界に橋を架ける～	320名	200万円
2022	東京都立竹早高等学校	東京都文京区	竹早の探究 ～ All Different, All Wonderful	520名	200万円
2022	新渡戸文化高等学校	東京都中野区	心が震えた想いをプロジェクトにするために ～クロスカリキュラムで生徒の心に火をともす 「SDGs de 未来構想」の教材開発～	99名	100万円
2022	成蹊高等学校	東京都武蔵野市	新たな価値を創造する先駆的挑戦 ～成蹊スタートアッププロジェクト　SEIKEI STARTUP Project～	340名	100万円
2022	東京都立南多摩中等教育学校	東京都八王子市	合言葉はCross the border、自分の枠を越える探究学習 ～多様な学びによる質の高い探究学習を通じて、 生徒のキャリア形成を図る～	960名	197.9万円
2021	千葉県立千葉東高等学校	千葉県千葉市	「東雲（しののめ）探Qプラン」による、 幅広い視野をもつ自立的探究者の育成	640名	130万円
2021	千葉県立佐倉高等学校	千葉県佐倉市	未来の種を蒔く SAKURA PROJECT	840名	200万円
2020	神奈川県立 横浜緑ケ丘高等学校	神奈川県横浜市	MIDORI RESEARCH PROJECT	840名	196万円
2020	神奈川県立光陵高等学校	神奈川県横浜市	「心やさしき社会のリーダー」へ、光陵の伝統とSDGsのミックスアップ！	640名	200万円
2021	横浜市立東高等学校	神奈川県横浜市	SDGs未来都市横浜発　グローカルリーダーの育成 ～課題発見力・課題解決力を身につけて未来を切り拓く～	840名	200万円
2022	自修館中等教育学校	神奈川県 伊勢原市	C-AIR（シー・エア）プログラム	192名	200万円
2022	新潟県立新津高等学校	新潟県新潟市	ClimbUpプランー「繋ぐ・拓く・創る」人になるためにー	480名	200万円
2021	富山県立入善高等学校	富山県下新川郡	NTS（入善ツーリズムスタディ） ～参与観察的フィールドワークによる 地域とともに考えるコミュニティ創造者の育成～	76名	100万円
2022	富山県立高岡南高等学校	富山県高岡市	「SOUTH探究プロジェクト～Beyond Yourself」…大学・地域と連携し、 探究力の育成を通して、生徒が本気で学びたいという意欲を涵養し、 大学での学びにつなげる	315名	200万円
2021	石川県立輪島高等学校	石川県輪島市	「WAJI活」半島の最先端から世界の最先端へ ①自律的・主体的に問題解決できる力 ②創造に対し挑戦し、未来を切り拓く力を身に付けるプログラム	224名	100万円
2022	石川県立金沢錦丘高等学校	石川県金沢市	「なりたい自分」への挑戦 ～探究で育む自己肯定感とキャリアデザイン力	640名	200万円
2020	国立高等専門学校機構 福井工業高等専門学校	福井県鯖江市	創造プロジェクト教育による 研究者・エンジニアへのステップフォワード	600名	200万円
2021	福井県立大野高等学校	福井県大野市	持続可能なコミュニティ「D−Kompas」の構築 ～オール大野による学校サポート体制を確立し、 生徒の主体的学びを支援～	369名	200万円
2021	福井県立羽水高等学校	福井県福井市	地域に提案！	870名	200万円

※都道府県順

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	対象者数	助成額
2021	山梨県立甲府西高等学校	山梨県甲府市	IBの手法を基礎とした、「総合的な探究の時間」における 課題研究論文の作成	620名	200万円
2020	長野市立長野高等学校	長野県長野市	Willから始まる探究の土壌づくり ～長野市立長野高校の実践から広がる文化の醸成～	320名	200万円
2020	長野県上伊那農業高等学校	長野県上伊那郡	チャレンジ「MIRAINAカンパニー」プロジェクト	38名	77万円
2021	長野県松本県ケ丘高等学校	長野県松本市	信州学からグローバル課題へ・探究を実践し続ける縣陵人を育てる Kenryo Researchers Program	970名	199.4万円
2021	岐阜県立斐太高等学校	岐阜県高山市	斐高生が結ぶ地域と世界！ ～地域で考え世界とつながる、地域振興プロジェクト！～	480名	100万円
2021	岐阜県立岐阜高等学校	岐阜県岐阜市	百折不撓・自彊不息の精神で目指せ! グローバルリーダー ～岐高型探究活動プログラムにより“清流の国ぎふ”から 世界への飛翔する若者の育成～	720名	200万円
2022	静岡県立富士高等学校	静岡県富士市	富士高型探究プログラム「心見考」（心でものごとを考え見極める）の 更なる深化を目指して ～県境をこえた教育連携の可能性～	853名	200万円
2020	愛知県立大府特別支援学校※2	愛知県大府市	同時双方向通信を用いた高校生支援 ～テレワークによる進路開拓・就労への挑戦、 病気療養生徒の単位取得のための支援～	（30名）	（100万円）
2020	名古屋大学教育学部 附属中・高等学校	愛知県名古屋市	「ハイブリッド」文理融合教育プログラム ～知りたい・やりたい・成し遂げたい～	360名	200万円
2022	愛知教育大学附属高等学校	愛知県刈谷市	愛教大SEHプロジェクト ～人生を切り拓く探究力の育成を目指した 探究活動「附高ゼミ」の実施～	320名	200万円
2021	三重県立神戸高等学校	三重県鈴鹿市	地域の未来を考え提案する探究活動「鈴鹿学」	600名	198万円
2021	三重県立津西高等学校	三重県津市	夢を叶え、未来を紡ぐ「津西! 探究Education」 ～学校全体で取り組む「探究学習」～	640名	200万円
2020	京都府立鳥羽高等学校	京都府京都市	「なぜ?」を問い、社会と関わる、 社会に飛び出すグローバル・リーダーの育成	560名	171.5万円
2020	京都府立海洋高等学校	京都府宮津市	高校生レストランによる「海業」後継者育成	29名	100万円
2020	京都府立城南菱創高等学校	京都府宇治市	菱創プロジェクト	480名	200万円
2020	京都府立桂高等学校	京都府京都市	段階的・総合的なKRPメソッドによる生涯にわたる探究者の育成	720名	100万円
2020	京都府立園部高等学校	京都府南丹市	SONOBE Global Research Program	255名	200万円
2020	京都府立丹後緑風高等学校 久美浜学舎	京都府京丹後市	「丹後知新」 ～“今”、紡ぐみらい～	100名	100万円
2020	京都市立日吉ヶ丘高等学校	京都府京都市	「世界をつなぐ越境者」育成プログラム ～生徒も先生も世界に踏み出そう～	480名	200万円
2021	京都市立堀川高等学校	京都府京都市	「よって、」と書けばいいわけじゃない。 ～論理的言語能力と将来の学びに向かう心に火をつける～	480名	150万円
2021	京都市立西京高等学校	京都府京都市	京都発! 未来の教室がある学校をめざして ―グローバルリーダーシップ の育成をめざしフィールドワークを軸とした探究プログラムの構築―	560名	200万円

※2　20年度のみ（掲載データは20年度）

4 2022年度 助成先一覧

※都道府県順

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	対象者数	助成額
2021	京都府立嵯峨野高等学校	京都府京都市	コロナ禍でも可能な国際交流 ～国際交流を通しての探究活動の活性化～	720名	180万円
2022	立命館宇治中学校・高等学校	京都府宇治市	日本×IBが作る世界水準の探究プログラムで令和の教育を創る ～探究で学校内外をつなぎ、ネットワークの力で生徒も教員も育つ～	1,250名	200万円
2022	京都府立向陽高等学校	京都府向日市	「Third Place, MUKO プログラム ～竹の都・向日市を第三の場所に～」	400名	100.2万円
2020	大阪府立岸和田高等学校	大阪府岸和田市	知の三現改革プログラム	640名	200万円
2020	大阪府立北野高等学校	大阪府大阪市	六稜 Task Project（学術研究の基礎としての課題研究）	320名	200万円
2020	大阪府立茨木高等学校	大阪府茨木市	IBARAMA ～「自主自律の精神」に基づき、 「高い志」と「枠を超える知性」を育む～	680名	200万円
2020	大阪府立生野高等学校	大阪府松原市	「ハングリーに学ぶ生徒」を育てるための、文系探究学習の指導と評価	520名	200万円
2020	大阪府立大阪ビジネス フロンティア高等学校	大阪府大阪市	小高連携プロジェクト ～子どもお店バトル～ ～カンボジアの子どもたちの夢を叶える一歩～	800名	100万円
2021	大阪府立水都国際中学校・ 高等学校	大阪府大阪市	世界も地域も私も変わる“Suito Action Project for SDGs”	320名	200万円
2021	大阪府立豊中高等学校	大阪府豊中市	豊高型課題研究、“響学”プログラム ～「ホンモノ」にふれ、「ココロ」を響かせ、真に学ぶ～	497名	126.1万円
2021	大阪府立住吉高等学校	大阪府大阪市	「SUKI」を極めるプロジェクト SUKIPRO～あなたの「SUKI」が世界を変える	560名	200万円
2022	大阪府立淀商業高等学校	大阪府大阪市	Road to EXPO 2025 “アントレプレナーチャレンジ” 地域を守れ!「淀翔モール」 防災イベントプロジェクト	508名	200万円
2022	大阪教育大学附属高等学校 池田校舎	大阪府池田市	未来の科学者を育成する「IKEFU KIZUNA PROGRAM」	320名	200万円
2022	大阪府立千里高等学校	大阪府吹田市	「国際科学高校」のグローバル・シチズンシップ教育プログラム ～〈ひと×探究×国際性〉ひととの出会いを通して将来ビジョンを描き、 世界に貢献する意欲と力を蓄える～	440名	200万円
2022	大阪府立布施工科高等学校	大阪府東大阪市	創る技術・造る技能と共に創造力を育てる 「価値創造型共育」プログラム	147名	100万円
2020	国立高等専門学校機構 明石工業高等専門学校	兵庫県明石市	3学年4学科横断型　工学実装教育プログラム	515名	200万円
2021	兵庫県立御影高等学校	兵庫県神戸市	伸ばせ！「みかげ力」～外部連携を活かした 生涯学び続ける生徒を育てる探究活動～	626名	200万円
2021	兵庫県立長田高等学校	兵庫県神戸市	「一芸一才」を活かして「安全な未来都市づくり」を担う 「アーバンクリエイター」育成方策の開発	960名	200万円
2021	神戸市立神港橘高等学校	兵庫県神戸市	多層的探究過程と学びの土壌で実現する地域協働探究 ～正解（こたえ）のない課題（とい）に挑み続ける「地域の人財（たから）」～	960名	200万円
2022	神戸市立葺合高等学校	兵庫県神戸市	Be a Glocal Citizen! 探究から実践へ ～地域・世界に貢献する人材の育成を目指す～	800名	200万円
2022	兵庫県立長田商業高等学校	兵庫県神戸市	高校生が株式会社「NAGAZON」を設立し、会社経営を行う！	74名	100万円

※都道府県順

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	対象者数	助成額
2022	親和女子高等学校	兵庫県神戸市	未来学プロジェクト ～「私のミライ」と「未来のワタシ」の交差点～	370名	200万円
2022	奈良県立畝傍高等学校	奈良県橿原市	生徒の探究心を高めるプログラム ～「本物」との出会いの創出とSTEAM教育を通して～	741名	150万円
2021	和歌山県立箕島高等学校	和歌山県有田市	地球市民プロジェクト ～みらいを変えるきっかけを～	160名	100万円
2022	和歌山信愛中学校高等学校	和歌山県 和歌山市	「和歌山発! 地域の未来を拓く鍵となる『Key Girl』育成プログラム」	640名	146.4万円
2021	鳥取県立鳥取西高等学校	鳥取県鳥取市	鳥取県、ラオスにおける水問題をテーマとする文理融合型探究学習	562名	200万円
2021	島根県立松江農林高等学校	島根県松江市	ご縁コンソーシアムから生まれる地域の人材育成 ～高校生と地域の協働による地域課題解決型学習の深化を目指して～	448名	200万円
2022	島根県立松江東高等学校	島根県松江市	地域共創人育成Project　アドバンスト ～子どもも育つ　大人も育つ　地域共創の拠点づくり～	364名	200万円
2021	岡山学芸館高等学校	岡山県岡山市	これからの社会を創造するグローカルリーダーシップの育成 ～社会課題の解決に正面から立ち向かうユース層の育成を目指して～	940名	200万円
2022	岡山県立倉敷鷲羽高等学校	岡山県倉敷市	「You Make 鷲羽! プロジェクト」	436名	200万円
2020	国立高等専門学校機構 呉工業高等専門学校	広島県呉市	インキュベーション教育プログラム	508名	200万円
2021	広島市立舟入高等学校	広島県広島市	広島、日本、世界へ届け! 舟入の「問い」! ～「問い」から始まり、「問い」で終わる舟入の「問い」立て探究～	320名	100万円
2022	広島県立広島井口高等学校	広島県広島市	ACT-i「デザイン思考」で世界を創造する。	600名	200万円
2022	広島県立呉三津田高等学校	広島県呉市	“探究とは何か”を問える探究者 −社会に根付くラーニング・プログラムを目指して	186名	100万円
2022	広島県立廿日市高等学校	広島県廿日市市	総合的な探究の時間『桜尾ゼミ』から『SACURA』へ ～「楽しい」を求めて、進化・深化するカリキュラム～	280名	100万円
2021	山口県立防府高等学校 佐波分校	山口県山口市	徳地コンソーシアム	200名	100万円
2020	徳島県立池田高等学校	徳島県三好市	対話による阿波池田シビックプライド探究プロジェクト	483名	200万円
2020	国立高等専門学校機構 阿南工業高等専門学校	徳島県阿南市	電気技術イノベーション実習	142名	100万円
2021	徳島県立城ノ内中等教育学校	徳島県徳島市	エシカルの窓から世界へ ～新しい価値を創造する～	465名	200万円
2022	徳島県立城西高等学校神山校	徳島県名西郡	循環型農業の実践を通した探究型学習プログラム	90名	100万円
2021	香川県立三木高等学校	香川県木田郡	SDGsを軸に、授業に地域と連携した体験活動を取り入れ、 3年間での生徒育成を考えた学校改革プロジェクト	450名	200万円
2021	香川県立高松西高等学校	香川県高松市	西高発 COOL JAPAN!	560名	200万円

4 2022年度 助成先一覧

※都道府県順

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	対象者数	助成額
2022	香川県立高松高等学校	香川県高松市	杉原千畝・幸子氏から広がる人道の輪 ～高校生同士の交流が世界へと繋がる～	700名	200万円
2022	香川県立津田高等学校	香川県さぬき市	私たちの町は私たちが創る ～産官学連携　住む町創造プロジェクト～	182名	200万円
2021	愛媛県立今治北高等学校 大三島分校	愛媛県今治市	大三島の地域文化遺産「大見神楽」の復活・伝承プロジェクト	85名	100万円
2021	愛媛県立南宇和高等学校	愛媛県南宇和郡	愛南未来づくりプロジェクト ～地域による、地域のための、地域の学校を目指して～	280名	180.8万円
2022	愛媛県立松山東高等学校	愛媛県松山市	東高 がんばっていきましょい ―グローカルな学びの継承―	720名	200万円
2022	愛媛県立川之江高等学校	愛媛県 四国中央市	“Catch The Dream” ～夢へとつながる探究的な学び～	353名	200万円
2021	高知県立山田高等学校	高知県香美市	よってたかって山高「探究」プログラム	330名	200万円
2020	福岡県立小倉高等学校	福岡県北九州市	倉高 ONLY ONE 計画	560名	200万円
2020	福岡県立修猷館高等学校	福岡県福岡市	Sure You Can プロジェクト	840名	200万円
2021	福岡県立春日高等学校	福岡県春日市	春日からHasshin（発信×発進）プロジェクト ～グローバル&グローカル人財の育成～	840名	200万円
2022	福岡県立ひびき高等学校	福岡県北九州市	『考エル　自分をカエル　未来をカエル』（カエルプロジェクト） ～探究的な学びを通したグローカル人材の育成～	700名	200万円
2021	佐賀県立佐賀農業高等学校	佐賀県杵島郡	農業高校の専門性を活かしたグローカル・リーダーの育成 ～持続可能な地域農業の実現に向けて～	236名	200万円
2022	佐賀県立佐賀商業高等学校	佐賀県佐賀市	本物を知り、伝統を守り、社会に貢献する商業人を育てる ～生徒と企業、地域人材をつなぎ、学びを深める体験型プロジェクト～	480名	200万円
2020	長崎県立諫早高等学校	長崎県諫早市	「自立し未来を創造する人材育成」諫早から世界へ、世界から諫早へ	835名	200万円
2020	長崎県立長崎東高等学校	長崎県長崎市	「ともによき世を創る」 ～世界の平和と共生を目指し、協働・共創でイノベーションを～	840名	200万円
2020	国立高等専門学校機構 佐世保工業高等専門学校	長崎県佐世保市	国際的地域性を活かした英語の壁を乗り越える 早期グローバルマインド育成プログラム	480名	200万円
2020	長崎県立佐世保西高等学校	長崎県佐世保市	佐世保西校ふるさと創生大作戦 ～佐世保と世界と未来を結ぶイノベーティブ人財育成～	712名	120万円
2021	長崎県立上五島高等学校	長崎県南松浦郡	進取（総合的な探究の時間）「若者が島の未来をつくる ～島の魅力を島外へ、島の未来を私たちで～」	140名	188万円
2020	国立高等専門学校機構 熊本 高等専門学校 熊本キャンパス	熊本県合志市	高専生の探究学習サイクルを起動する 社会的課題解決型教育プログラム	150名	96万円
2020	国立高等専門学校機構 熊本 高等専門学校 八代キャンパス	熊本県八代市	新たな社会を創造する人材育成のためのリベラルアーツ教育プログラム ～生き方、学び方の設計と実践を促進する教育の構築と実践～	390名	145.1万円
2021	熊本県立水俣高等学校	熊本県水俣市	水俣と世界を「いのち」でつなぐ みなまたMOYAIST（モヤイスト）の養成 ～「発信」から「つなぐ」へ～	395名	200万円

※都道府県順

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	対象者数	助成額
2021	熊本県立熊本高等学校	熊本県熊本市	ワクワクロスリアリティフォーラム（WXRフォーラム）	1,200名	200万円
2021	大分県立大分上野丘高等学校	大分県大分市	SGS未来創生「大空プロジェクト」	640名	200万円
2021	宮崎県立宮崎東高等学校 定時制夜間部	宮崎県宮崎市	生徒が生きがいを感じるための探究活動	70名	100万円
2021	宮崎県立都城西高等学校	宮崎県都城市	都城西高校を拠点とした地域総ぐるみの次世代リーダーの育成	400名	200万円
2022	宮崎県立宮崎南高等学校	宮崎県宮崎市	産学官連携による都市型コミュニティ・スクールを目指して ～地域の次世代リーダーとして、地域に根差し、貢献できる人材の育成に資する産学官連携による人の地域循環教育～	1,061名	199.8万円
2021	鹿児島県立沖永良部高等学校	鹿児島県大島郡	「沖高みらい探究プロジェクト」 ～平和で持続可能な島づくりのために～	163名	100万円
2022	鹿児島県立屋久島高等学校	鹿児島県熊毛郡	探究活動を主体とした「屋久高（YAKKO）プロジェクト」 ～地域愛を育み、自己肯定感を高める取組～	150名	168万円
2022	鹿児島県立大島高等学校	鹿児島県奄美市	奄美から日本へ、奄美から世界へ ～奄美の高校生による課題研究発表会～	400名	200万円
2022	鹿児島県立福山高等学校	鹿児島県霧島市	現代版郷中教育による未来の人材育成プロジェクト ～地域で活躍できるクリエーター・イノベーターの育成をめざして～	200名	200万円

カテゴリー1対象者数 ····· 計７万4,409人
カテゴリー1助成額 ····· 計２億6,142.8万円

カテゴリー2

※組織名五十音順

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	対象者数	助成額
2020	一般社団法人 i.club	東京都文京区	innovation GO　～全国各地とつながり、未来をつくる、 オンライン探究プログラム～	100名	850万円
2022	株式会社あしたの寺子屋	北海道札幌市	地域の新たなイベントづくりに向けた伴走型教育プログラム ～コロナに打ち勝つ「理想のイベント」をつくろう!～	100名	875万円
2020	NPO法人 アスクネット	愛知県名古屋市	SPIRAL（Social Platform with Innovation, Relationship, Activation and Learning）	150名	800万円
2022	一般社団法人 アンカー	東京都中央区	大学生による中高生のためのSDGs/サスティナビリティアワード （Sustainability Award for Students by Students:#SASS2022）	1,000名	729.2万円
2020	一般社団法人 ELAB	東京都港区	「未来を描くプログラム」 ～未来を創り出す力を育むアートによる学びのプログラム～	760名	650万円
2022	一般社団法人 ウィルドア	神奈川県川崎市	課外にある学びの資源を“選択・活用する力”を育み、 実行するための“つながり”を届けるプログラム「willdoor」	1,200名	758万円
2022	株式会社a.school	東京都文京区	プロや大学生、仲間と共に、好きを徹底的に探究!　『01ゼミ』	200名	770万円
2020	NPO法人 エティック	東京都渋谷区	ワンダリングチャレンジ ～3人1組で挑み、競う、ゲーミフィケーション型探究学習～	3,000名	550万円
2020	認定NPO法人 カタリバ	東京都杉並区	全国高校生MY PROJECT AWARDーオンラインSummit	1,500名	660万円

2022年度 助成先一覧

※組織名五十音順

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	対象者数	助成額
2022	認定NPO法人 カタリバ	東京都杉並区	教育リソースの共有と連携を通した個別最適化によって、小規模校の教育価値を最大化する「COLLABOハイスクール・ネットワーク構想」	250名	632.7万円
2021	学校法人 金沢工業大学	石川県野々市市	学都圏“いしかわ”創成 ～ラーニングストラテジーを学ぶPBLコンペティション～	56名	638.9万円
2021	一般社団法人 Kizuna Across Cultures	東京都豊島区	オンライン国際協働学習プログラム Global Classmates Plus（グローバル・クラスメート・プラス）	400名	631万円
2021	株式会社 教育と探求社	東京都千代田区	探究活動を実践に移し、 社会実装する部活動プロジェクト MIRAIB.（ミライブ）	500名	681.8万円
2022	株式会社 教育と探求社	東京都千代田区	「問い」で授業と出会い直す Question X	1,000名	843万円
2020	認定NPO法人 金融知力普及協会	東京都中央区	リアビズ Real Business ～高校生模擬起業グランプリ～	80名	800万円
2020	認定NPO法人 グローカル人材開発センター	京都府京都市	Glocal Shift Programme ～君が世界を変える、君の世界を変える～	40名	789万円
2022	一般社団法人 高校生みらいラボ	神奈川県 足柄下郡	大自然溢れる空間で、人と繋がり、自らの問いにひたすら 向き合い暮らす、次世代型探究プログラム“Co-living Camp”	300名	485万円
2021	公益財団法人 国際高等研究所	京都府木津川市	IIAS塾ジュニアセミナー「独立自尊の志」養成プログラム	60名	628万円
2022	一般社団法人 KOTOWARI	福島県大沼郡	KOTOWARI	200名	501.9万円
2020	国立大学法人 滋賀大学	滋賀県彦根市	英国で開発された子ども向けマインドフルネス・プログラム “.b:ドットビー”の日本への導入	300名	300万円
2022	特定非営利活動法人 じぶん未来クラブ	東京都千代田区	やってみよう、が未来をつくる 自分探求「Yes, And!」プロジェクト	60名	835万円
2021	認定特定非営利活動法人 育て上げネット	東京都立川市	若者の孤立無業化予防のためのキャリア教育プログラム Life Connection ライフコネクション	3,000名	849万円
2021	一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム	島根県松江市	未来の地域・社会の牽引するグローカルリーダー探究実践プログラム	30名	669.4万円
2020	認定NPO法人 日本ファンドレイジング協会	東京都港区	高校生の社会貢献チャレンジに実行力をつける 大人との協働機会の創出	2,000名	600万円
2022	一般社団法人 フリンジシアターアソシエーション	京都府京都市	「演劇で学ぼう」 表現する⇆受け止める循環をつくる、アートプログラム	550名	654.4万円
2022	株式会社ミエタ	東京都千代田区	学校間で切磋琢磨しながら『社会実装』に挑戦する長期ゼミナール	240 名	900 万円
2021	一般社団法人 未来キッズコンテンツ総合研究所	東京都港区	競技会形式で最新のAI/ICT関連技術を競う 「シンギュラリティバトルクエスト」	1,000名	800万円
2020	読売新聞東京本社 教育ネットワーク事務局	東京都千代田区	高校生向け医療体験プログラム	40名	621万円
2021	株式会社rokuyou	沖縄県中頭郡	地域企業と肝心（ちむぐくる）育む 公立高校むけPBLプログラム	1,400名	527万円
2021	国立大学法人 和歌山大学	和歌山県和歌山市	宇宙甲子園	1,000名	755万円

カテゴリー2対象者数 ····· 計２万516人
カテゴリー2助成額 ····· 計２億784.3万円

カテゴリー3

※組織名五十音順

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	対象者数	助成額
2020	一般社団法人 inochi未来プロジェクト	大阪府大阪市	inochi Gakusei Innovator's Program	300名	1,000万円
2020	国立大学法人 大阪大学	大阪府吹田市	大阪大学の教育研究力を活かしたSEEDSプログラム ～未来を導く傑出した人材発掘と早期育成～	150名	1,800万円
2020	加速キッチン合同会社 （旧 探Q（東北大学））	宮城県仙台市	中高大・研究所による宇宙線観測活動コンソーシアム	150名	540万円
2022	国立大学法人 金沢大学	石川県金沢市	未来成長分野開拓型再創業（Re-Startup） アントレプレナー教育プログラム	65名	794万円
2022	国立大学法人 東海国立大学機構 岐阜大学 高等研究院	岐阜県岐阜市	岐阜大学 アントレプレナー育成プログラム　～野心よ集え～	100名	1,600万円
2022	国立大学法人 京都大学	京都府京都市	京都大学異能プログラム	120名	1,800万円
2020	国立大学法人 筑波大学	茨城県つくば市	未来を切り拓くフロントランナー育成プログラム・筑波大学 GFEST（Global Front-runner in Engineering, Science & Technology）	40名	1,726万円
2022	国立大学法人 東京大学 生産技術研究所	東京都目黒区	インクルーシブな未来社会をデザインする東京大学STEAM型創造性教育プログラム	100名	1,800万円
2021	国立大学法人 東北大学	宮城県仙台市	東北から世界へ みらい型「科学者の卵養成講座」 ～集え、異能な高校生よ。創れ、未来の理想社会を～	100名	1,970万円
2022	国立大学法人 東北大学	宮城県仙台市	～未来を大胆に切り拓く三綱領～未来創造・価値工房・異能発掘　アントレ人材育成プログラム	300名	2,000万円
2020	国立大学法人 東海国立大学機構 名古屋大学	愛知県名古屋市	名大みらい育成プロジェクト: 国際環境で地球規模の問題に挑戦する	100名	2,000万円
2021	認定NPO法人 very50	東京都豊島区	社会起業で世界を変える実践型アントレプレナーシッププログラム 「EGG:Entrepreneurship in the Global Ground」	100名	870万円
2021	国立大学法人 山形大学	山形県山形市	山形大学発IT人材育成 ～シリコンバレー版スーパーエンジニアプログラミングスクール～	240名	1,226.1万円
2022	学校法人 早稲田大学	東京都新宿区	W-EDGEユース・イノベーター（WEYI）育成プログラム	100名	1,800万円

カテゴリー3対象者数 ····· 計1,965人
カテゴリー3助成額 ····· 計２億926.1万円

カテゴリー4

※組織名五十音順

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	対象者数	助成額
2021	愛知県公立大学法人 愛知県立大学	愛知県長久手市	愛県大教養教育新カリキュラム:「県大世界あいち学」の始動	710名	736.1万円
2022	一般社団法人 アートをコアとしたコミュニケーションデザイン大学コンソーシアム	京都府京都市	グローバル・エシカル教育のための、 創作アートを応用したアクティブ・ラーニング・プログラムの開発と実践	120名	120万円
2021	国立大学法人 大阪大学	大阪府吹田市	「対話」で開く「学問への扉」 ～少人数セミナー型初年次導入科目の挑戦～	3,400名	800万円
2022	国立大学法人 岡山大学	岡山県岡山市	地域の未来デザイン ～社会共創と分野横断型学習で 現代社会課題に挑む「恩送り」の探究プログラム～	150名	136万円
2022	国立大学法人岡山大学大学院 教育学研究科 国吉康雄記念・ 美術教育研究と地域創生講座	岡山県岡山市	テーブル・ロール・プレイング・ゲームを通して学ぶ物語の作法? アナログゲームシステムで養う「思考する力・対話する力・他者と協働する力」	240名	221.3万円
2021	関西学院大学 ハンズオン・ラーニングセンター	兵庫県西宮市	多拠点型の高等教育OSプログラム ～ハンズオン・ラーニング・プログラムの構築～	940名	300万円
2021	神田外語大学	千葉県千葉市	グローバル・チャレンジ・ターム	60名	200万円
2022	京都光華女子大学	京都府京都市	実践知を育てる ― 今とこれからを豊かに、 確かに生きる人間力の形成プログラム ―	497名	422.9万円
2021	上智大学	東京都千代田区	「基盤教育センター」構想 −全学共通科目の見直しによる新しい教養教育の実践	3,000名	450万円
2021	清泉女子大学	東京都品川区	「グローバル・シティズンのための101のコンセプト」 ～VUCA時代におけるアクティブ地球市民育成プログラム～	60名	60万円
2021	国立大学法人 筑波大学 社会・国際学群	茨城県つくば市	TSUKUBA 社会国際学初年次チュートリアルプログラム TSUKUBA Tutorial Freshman Program in Social and International Studies (T-FEP)	120名	120万円
2021	国立大学法人 東北大学	宮城県仙台市	挑創カレッジと学問論でつむぐ 分野横断型リベラルアーツプログラム	2,400名	725.2万円
2022	公立大学法人 新潟県立大学	新潟県新潟市	調べ、学び、考え、新潟を救え! ～データに基づく公共政策と自治の実践をオープン・コース・ウェアに～	150名	150万円
2021	国立大学法人 新潟大学	新潟県新潟市	新潟大学ダブルホーム ～地域と共に創る「新たなふるさと」～	460名	305万円
2022	法政大学	東京都千代田区	STARTプログラム （SDGs Target Active learning Revolutionary Trial Program）	200名	238万円
2021	立命館大学	京都府京都市	学びのコミュニティ・オーガナイジングによる未来共創プログラム ～自由に生きるための知性を磨く～	500名	500万円
2022	早稲田大学 スポーツ科学学術院	東京都新宿区	専門領域と融合したアカデミックスキルズ教育 ―「共有し、考え、伝え、発信する」	800名	296万円

カテゴリー4対象者数 ····· 計1万3,807人
カテゴリー4助成額 ····· 計5,780.5万円

カテゴリー5

採択年度	組織名	所在地	教育プログラム名	対象者数	助成額
2021	国立大学法人 東京学芸大学	東京都小金井市	高等学校における授業及び教師教育モデルの開発・普及プロジェクト	10,000名	4,000万円
2021	株式会社a.school	東京都文京区	探究学習ファシリテーター講座「探究PLAYers!」	100名	850万円
2021	一般社団法人 ティーチャーズ・ イニシアティブ	東京都千代田区	「主体的・協働的な学び」を実践する教員養成のための 指導主事（教員）研修	24名	973.4万円
2022	一般社団法人ELAB	東京都港区	主体的・協働的学習を推進するための 「創造的コミュニケーション力」開発講座	150名	740万円
2022	国立大学法人 島根大学 教育学部	島根県松江市	地域教育魅力化コーディネート人材育成プログラム	60名	999.3万円

カテゴリー5対象者数 ····· 計1万334人
カテゴリー5助成額 ····· 計7,562.7万円

貸借対照表

2022年3月31日現在

（単位：円）

科　　目	当年度	前年度	増　減
Ⅰ　資産の部			
1．流動資産			
現金預金	717,417,381	361,363,278	356,054,103
未収金	57,106,016	30,814,147	26,291,869
前払費用	1,504,985	1,504,985	0
流動資産合計	776,028,382	393,682,410	382,345,972
2．固定資産			
その他固定資産			
建物付属設備	3,366,249	3,493,042	▲ 126,793
什器備品	1,697,181	1,272,356	424,825
ソフトウェア	8,113,751	8,125,104	▲ 11,353
その他固定資産合計	13,177,181	12,890,502	286,679
固定資産合計	13,177,181	12,890,502	286,679
資産合計	789,205,563	406,572,912	382,632,651
Ⅱ　負債の部			
流動負債			
未払金	20,906,360	1,816,360	19,090,000
未払費用	5,229,592	3,954,982	1,274,610
流動負債合計	26,135,952	5,771,342	20,364,610
負債合計	26,135,952	5,771,342	20,364,610
Ⅲ　正味財産の部			
1．指定正味財産			
指定正味財産合計	0	0	0
2．一般正味財産	763,069,611	400,801,570	362,268,041
正味財産合計	763,069,611	400,801,570	362,268,041
負債及び正味財産合計	789,205,563	406,572,912	382,632,651

正味財産増減計算書

※2021年4月1日から2022年3月31日まで

（単位：円）

科　　目	当年度	前年度	増　減
Ⅰ　一般正味財産増減の部			
1．経常増減の部			
(1) 経常収益			
受取寄付金	1,010,000,000	600,000,000	410,000,000
雑収益	6,974	69,488	▲ 62,514
経常収益計	1,010,006,974	600,069,488	409,937,486
(2) 経常費用			
事業費	623,087,922	274,569,574	348,518,348
役員報酬	8,400,000	8,400,000	0
給料手当	17,089,000	22,597,000	▲ 5,508,000
会議費	312,137	391,564	▲ 79,427
接待交際費	16,740	48,553	▲ 31,813
旅費交通費	4,324,627	2,486,079	1,838,548
通信運搬費	529,122	259,799	269,323
ＯＡ関係費	1,877,150	1,684,100	193,050
減価償却費	2,404,925	2,027,120	377,805
消耗什器備品費	656,163	5,082	651,081
消耗品費	394,045	94,952	299,093
修繕費	66,605	426,195	▲ 359,590
印刷製本費	1,600,706	1,033,829	566,877
光熱水料費	110,858	106,539	4,319
賃借料	12,641,868	12,723,048	▲ 81,180
広告宣伝費	41,981,775	16,695,074	25,286,701
諸謝金	13,519,200	9,395,510	4,123,690
租税公課	42,000	0	42,000
支払助成金	463,815,984	183,368,453	280,447,531
支払報奨金	1,550,000	0	1,550,000
委託費	50,762,660	12,713,927	38,048,733
雑費	992,357	112,750	879,607
管理費	24,651,011	27,417,777	2,766,766
役員報酬	4,020,000	4,020,000	0
給料手当	7,461,000	10,180,000	▲ 2,719,000
福利厚生費	161,260	206,502	▲ 45,242
会議費	922,121	512,535	409,586
接待交際費	0	2,166	▲ 2,166
旅費交通費	125,664	111,414	14,250
通信運搬費	956,253	929,641	26,612
ＯＡ関係費	921,426	913,946	7,480
減価償却費	156,846	141,462	15,384
消耗什器備品費	281,213	103,928	177,285
消耗品費	118,218	273,686	▲ 155,468
修繕費	28,545	248,655	▲ 220,110
印刷製本費	556,473	513,645	42,828
光熱水料費	47,511	45,661	1,850
賃借料	6,151,872	6,151,872	0
租税公課	171,800	137,300	34,500
支払報酬	2,114,875	2,366,464	▲ 251,589
雑費	455,934	558,900	▲ 102,966
経常費用計	647,738,933	301,987,351	345,751,582
評価損益等調整前当期経常増減額	362,268,041	298,082,137	64,185,904
評価損益等計	0	0	0
当期経常増減額	362,268,041	298,082,137	64,185,904
2．経常外増減の部			
(1) 経常外収益			
経常外収益計	0	0	0
(2) 経常外費用			
経常外費用計	0	0	0
当期経常外増減額	0	0	0
当期一般正味財産増減額	362,268,041	298,082,137	64,185,904
一般正味財産期首残高	400,801,570	102,719,433	298,082,137
一般正味財産期末残高	763,069,611	400,801,570	362,268,041
Ⅱ　指定正味財産増減の部			
当期指定正味財産増減額	0	0	0
指定正味財産期首残高	0	0	0
指定正味財産期末残高	0	0	0
Ⅲ　正味財産期末残高	763,069,611	400,801,570	362,268,041

Chapter 6

財団概要

評議員・役員

◆評議員

安西 祐一郎
（公益財団法人東京財団政策研究所 所長、独立行政法人日本学術振興会 顧問、元 慶應義塾長）

島村 琢哉
（AGC株式会社 取締役会長）

杉山 博孝
（三菱地所株式会社 取締役会長）

田中 愛治
（早稲田大学 総長）

田中 優子
（法政大学 名誉教授、前 法政大学総長）

永野 毅
（東京海上ホールディングス株式会社 取締役会長）

松本 紘
（国際高等研究所所長、前 理化学研究所理事長、元 京都大学総長）

柳井 秀朗
（三菱金曜会事務局長）

◆理事長

平野 信行
（株式会社三菱UFJ銀行 特別顧問）

◆常務理事

藤田 潔

◆理事

赤堀 侃司
（東京工業大学 名誉教授）

木村 千章
（三菱重工業株式会社 執行役員）

篠原 聡子
（日本女子大学 学長）

坂東 眞理子
（昭和女子大学 理事長・総長）

藤原 謙
（三菱ケミカルグループ株式会社 取締役 執行役エグゼクティブバイスプレジデント）

増田 邦昭
（三菱電機株式会社 取締役常務執行役）

渡邉 肇
（公益財団法人三菱財団 常務理事）

◆監事

三宅 茂久
（税理士法人山田&パートナーズ 統括代表社員）

アドバイザリーボード委員

大島 まり
（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所 教授）

小林 浩
（リクルート進学総研 所長、リクルート「カレッジマネジメント」編集長）

鈴木 寛
（東京大学 教授、慶應義塾大学 教授）

日比谷 潤子
（学校法人聖心女子学院 常務理事、前 国際基督教大学学長）

増永 路子
（三菱重工業株式会社 グループ戦略推進室サステナビリティ推進室長）

宮本 久也
（東京都立八王子東高等学校 統括校長）

※2022年7月1日現在（五十音順・敬称略）

一般財団法人
三菱みらい育成財団
Mitsubishi Memorial Foundation for Educational Excellence

所在地	東京都千代田区丸の内二丁目2番3号 丸の内仲通りビル9階
設立日	2019年10月1日
事業内容	教育プログラムや教育事業者への助成、事業活動のサポート
事業期間	2019年10月1日～2031年3月31日まで（予定）
総事業費	約100億円
お問合わせ先	info@mmfe.or.jp
制作協力	株式会社エム・シー・コミュニケーションズ
デザイン	弾デザイン事務所

発行日：2022年9月

一般財団法人
三菱みらい育成財団

www.mmfe.or.jp

〒100-0005　東京都千代田区丸の内二丁目2番3号　TEL:03-6206-3435 ／ FAX:03-6206-3436